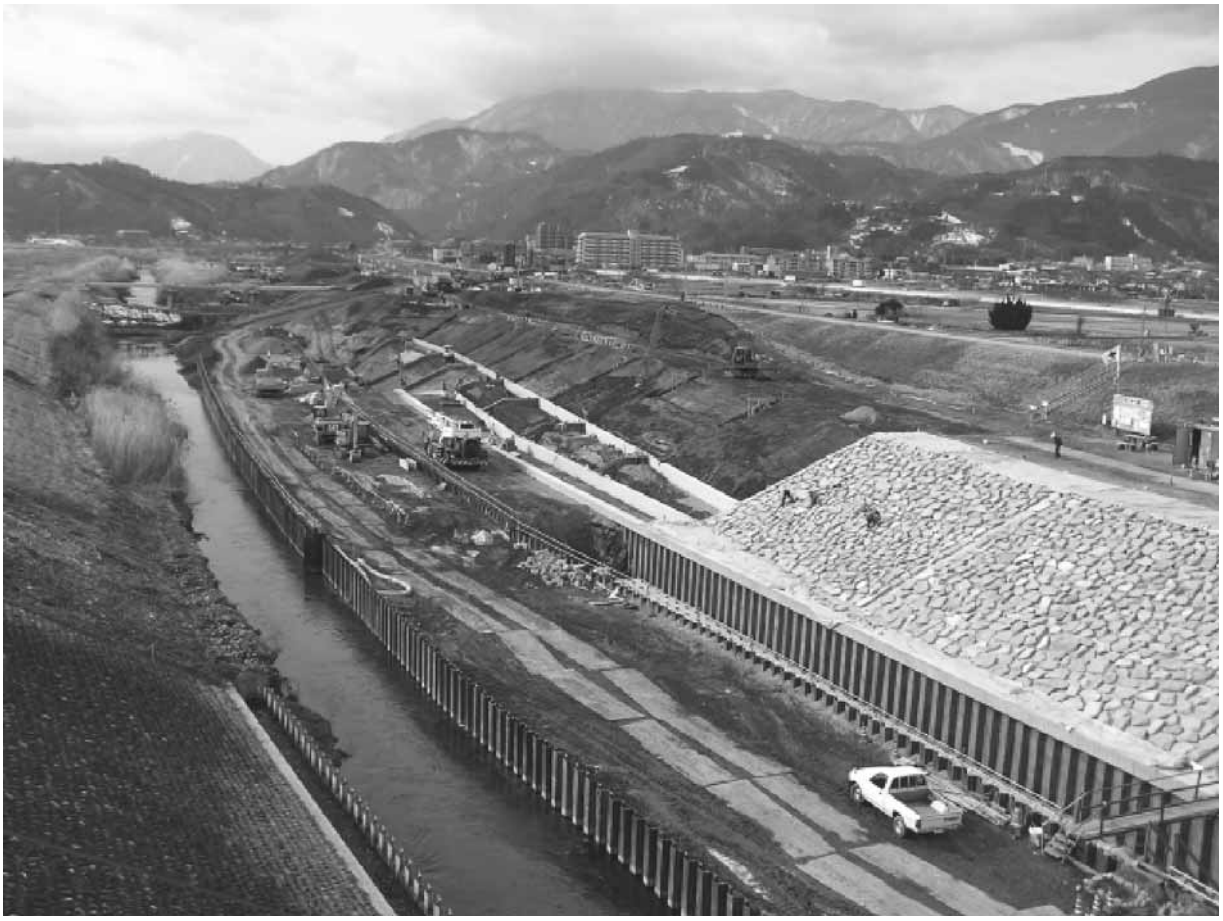
山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第259集

青　柳　河　岸　跡

－増穂地区築堤護岸整備事業に伴う青柳河岸跡発掘調査報告書－



2009. 3月

山　梨　県　教　育　委　員　会

国土交通省関東地方整備局

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第二五九集

青柳河岸跡

二〇〇九・三

山梨県教育委員会
国土交通省関東地方整備局

青　柳　河　岸　跡

－増穂地区築堤護岸整備事業に伴う青柳河岸跡発掘調査報告書－

2009. 3月

山 梨 県 教 育 委 員 会
国土交通省関東地方整備局

序

本書は、国土交通省関東地方整備局による増穂地区築堤護岸整備事業に伴う青柳河岸跡の発掘調査の成果をまとめたものです。

青柳河岸は、鰍沢河岸・黒沢河岸とともに「甲州三河岸」として江戸時代に整備された富士川舟運の拠点であります。江戸幕府の直轄地であったこともあり、甲府盆地が三つの代官所の支配下におかれてからは、甲府盆地の年貢米の多くはそれぞれの河岸に設けられた蔵に集積され、御廻米として江戸に送られていました。鰍沢河岸は甲府代官所の、黒沢河岸は石和代官所の、そして青柳河岸は市川代官所の管轄にあったのです。

青柳河岸は、江戸時代の寛永１５年に米蔵が建てられ、御廻米を中心とした河岸としてその機能を果たしてきましたが、維新以後は明治７年に富士川運輸会社として新たな物資輸送の拠点として生まれ変わりました。その後約３０年の時が経った明治３６年、中央線の開通などに伴ってこの会社も解散することとなり、青柳河岸は姿を消していったのです。

河岸に建てられていた米蔵は、解散後の明治３８年に地元の秋山源兵衛氏が払い下げを受けて移築し、現在まで残されています。この建物は何度となく改修されましたが、その構造については旧状を保っています。

ところで、本県にあって明治時代は水害の多い時代でもありました。特に明治１４、１８、２９、４０年は、大洪水の年でした。１８年には大洪水に際し釜無川（富士川）の大改修工事が行われています。２９年には、竜王町（現在の甲斐市）にある信玄堤が決壊したほどの洪水があり、４０年の出水では笛吹川の川筋が大きく変わり、現在の流路となりました。

青柳河岸については、大正年間に富士川土堤が大改修されたことから、流路が東に寄せられたため、河岸のあった場所の多くは河川敷となってしまったようです。

以上のような洪水や土堤の改修などにより、青柳河岸跡の原状は相当変化しているものと推測できます。

今回の発掘調査では、河岸跡の全体像をとらえることはできませんでしたが、出土した陶磁器類や瓶類などから、河岸が廃止されてからしばらくの期間を経た後、土堤状の高まりが構築され、その後陶磁器類や瓶類などが投げ込まれた状況が確認されました。また、河岸本体は、川の中州辺りにまで延びていることが推測できるとともに、更にここから町並み方面へと続く道の存在も明らかになりました。

これらの成果が、富士川舟運にかかわる歴史を解き明かすことに貢献できれば幸いです。

最後に、発掘調査および報告書作成にあたり、さまざまなご協力をいただいた関係者や関係機関の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成２０年１１月３０日

山梨県埋蔵文化財センター
所　長　　新　津　　健

青柳河岸跡の概要

山梨県には、大きな河岸跡が三ヶ所あります。一つ目は、鰍沢町の「鰍沢河岸跡」、二つ目は、市川三郷町（旧市川大門町）にある「黒沢河岸跡」、三つ目は、増穂町の「青柳河岸跡」です。

旧市川大門町と増穂町は、南流する富士川によって東西に分けられています。現在、両町を結んでいるのは、富士川に架けられた「富士川大橋」（平成９年建設）です。ですから、青柳河岸が活発だった頃は、高田の渡しがあり、富士川大橋の上流に建設された三郡橋架橋完成（昭和47年三郡東橋、昭和51年三郡西橋）までの間、渡し舟で市川大門町と増穂町を行き来していました。

右の写真を見てください。この写真の手前が、平成１０年に発掘調査を実施した増穂町の「町屋口遺跡」です。奥の左右に流れているのは富士川で、左が北で右が南です。そして、山が見えている付近が市川三郷町で、川に架けられているのが富士川大橋です。

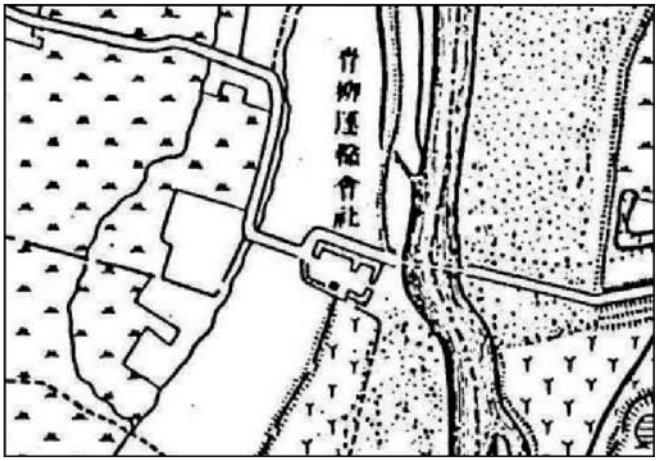
右の写真は、五明川と富士川に挟まれた場所で、試掘調査によって「青柳河岸跡」の本体が埋まっていることが確認されています。

さて、今回の発掘調査では、土堤状に高く砂が盛られた上に、陶磁器類や薬ビンなどがたくさん見つかりました（左の写真）。調査の結果、これらのものは、青柳河岸（青柳運輸会社）が解散となった後に投げ込まれたことがわかりました。土堤状の高まりを掘り下げていくと粘土の層が３面あり、どの粘土層も上面には小砂利が敷かれ非常に堅く締まった道がありました。

左の写真は、今回報告する「青柳河岸跡」の発掘調査前の状況です。富士川大橋の上から下流側に撮影したものです。この細い川は、「五明川」といいます。

青柳河岸跡は、五明川の工事などにより一部壊されましたが、大部分はこの川の更に左の富士川までの間に埋まっています。

しかし、これらの道は、河岸が解散した後に掘削されたので、道の続き方や広さなどはわかっていま



せん。

左の地図は、明治２１年に作成されたものの一部分で青柳の河岸が描かれています。青柳村明細帳には、「御蔵道長四七四間、横二間」（天保三年）と書かれているようです（「富士川水運」山梨県歴史の道調査報告書第 19 集　山梨県教育委員会　より）。

この測量図から、明治２１年のこの段階では、青柳河岸がまだ健在であったことがわかります。その後、明治３６年に解散し、３８年には御米蔵が移築されました。

出土品の中には、電線を巻き付けるための碍子（がいし）が見つかっています。明治３２年に芦川に発電所が建設され、翌年３３年には市川大門町や甲府市の中央部に電気が送られました。増穂町に初めて電灯がついたのは、明治４５年のことでした（「増穂町誌」史料編）。

また、別の出土品では徳利に書かれた「不知火」の文字があり、明治２７年に商標が登録され専用権が得られています。増穂町の秋山酒店や秋山酒造「正宗」、そして皿の内面に書かれた「イチリキ　正宗」（外面には青柳町　一力萬屋醸造店と書かれている）など、地域の歴史を知る手がかりとなる品物も見つかりました。

薬ビンでは、蘆澤醫院･芦澤醫院（旧字体の蘆澤（新、芦沢）と醫院（新、医院））、久保内科醫院については、増穂町に古くからあった医院でしょうか。回春堂醫院、横手醫院については、増穂町或いはその付近の医院と思われます。特に、薬ビンについては、鰍沢河岸跡でも多量に見つかっています。様々な種類の薬ビンは、鰍沢町に存在していた医院名などでしょうか。

その他のガラス瓶では、目薬瓶、ラムネ瓶、ワイン瓶、ビール瓶、カルピス瓶などが見つかっています。そして、生活用品としての茶碗、湯呑み、皿、鉢、急須や土瓶などの陶磁器類も見つかりました。

しかし、繁栄していた頃の青柳河岸に伴う出土品ではないものの、時代を反映したこれらの製品については、今は見ることの少ない品物ばかりです。

例　言

1　本書は、山梨県南巨摩郡増穂町青柳地内に所在する青柳河岸跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は増穂地区築堤護岸整備事業に先立ち、山梨県教育委員会が国土交通省関東地方整備局から委託を受け、山梨県埋蔵文化財センターが実施した。

3　発掘調査は、平成１９年６月４日から同年９月２８日まで、基礎的整理作業は同年１１月１日から平成２０年３月３１日、本格的整理作業は平成２０年５月２６日から同年　１１月３０日までである。

4　本書の執筆・編集は、山本茂樹と猪俣一弘が行った。

5　石垣測量用写真撮影、航空写真撮影および測量図化作業は、株式会社シン技術コンサルに、測量杭については昭和測量株式会社へ委託した。型紙摺絵や銅板転写についての実測・トレースは、株式会社アルカに委託した。

6　本書に係る資料は、山梨県埋蔵文化財センターが一括保管している。

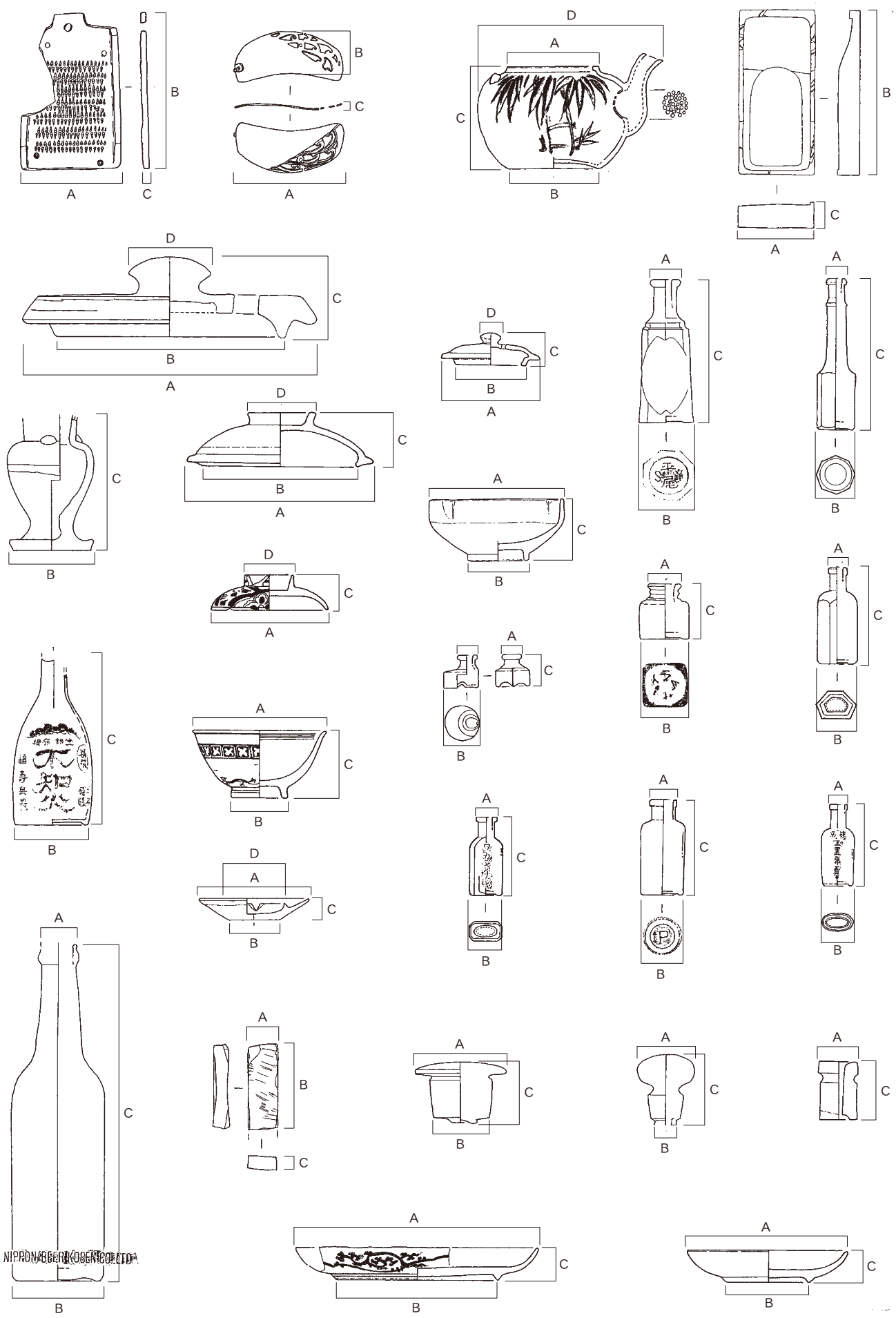
7　発掘調査および整理・報告書作成に係る組織は以下のとおりである。

調　査　主　体　山梨県教育委員会
調　査　機　関　山梨県埋蔵文化財センター
発掘調査担当　山本茂樹・猪俣一弘
発掘調査作業員　石井弘文、河野逸弘、斉藤重信、神沢正孝、久保建司、新谷和美、依田和美、土井みさほ、田中初子、穐山隼也、深沢和樹、マスード・オゼール
（平成１９年６月４日～９月２７日）
H19 基礎的整理作業　新谷和美、小池美穂子、土井みさほ、依田和美、久保建司
（平成１９年１１月１日～平成２０年３月１４日）
H20 本格的整理作業　新谷和美、小池美穂子、依田和美
（平成２０年５月２６日～６月２０日）
原稿執筆作業など　平成１９年７月～平成２０年１１月３０日

凡　例

1　出土遺物の実測図については、出土位置および番号が付してある。また、縮尺は１／３である

2　各実測の計測位置は、凡例図で示したとおりである。



凡例図

本　文　目　次

口　絵
序
例　言
目　次
第１章　調査の経緯と経過
第１節　調査に至る経緯 ---------- 1
第２節　調査までの協議と調査経過 ---------- 1
第２章　地理的環境と歴史的環境
第１節　地理的環境 ---------- 2
第２節　歴史的環境 ---------- 2
第３節　青柳河岸の歴史と関連事業および周辺の調査 ---------- 4
第３章　検出された遺構と出土品
第１節　遺構 ---------- 7
第２節　各ブロックの出土品について ---------- 14
第４章　まとめ

挿　図　目　次

第１図　青柳河岸跡とその周辺遺跡 ---------- 4
第２図　青柳河岸跡および周辺の変遷地図 ---------- 5
第３図　青柳河岸跡遺構全体図 ---------- 8
第４図　石垣の全体図 ---------- 9
第５図　石垣平面図・立面図および土層図 ---------- 10
第６図　土堤状の高まりおよび断面図 ---------- 11
第７図　土堤状の高まりの下層の状況図・断面図および土層図 ---------- 12
第８図　土堤状の高まり土層図・Ｆブロック平面・断面図・７トレンチ土層 ---------- 13
第９図　Ａブロック　出土状況 ---------- 16
第 10 図　Ｂブロック　出土状況 ---------- 17
第 11 図　Ｃブロック　出土状況 ---------- 18
第 12 図　Ｄブロック　出土状況 ---------- 19
第 13 図　Ｅブロック　出土状況 ---------- 20
表 - １ ---------- 21
表 - ２ ---------- 21
表 - ３ ---------- 22
表 - ４ ---------- 22
表 - ５ ---------- 23
表 - ６ ---------- 25
表 - ７ ---------- 26
第 14 図　磁器（１） ---------- 28
第 15 図　磁器（２） ---------- 29
第 16 図　磁器（３） ---------- 30
第 17 図　磁器（４） ---------- 31
第 18 図　磁器（５） ---------- 32
第 19 図　磁器（６） ---------- 33
第 20 図　ガラス製品（１） ---------- 34
第 21 図　ガラス製品（２） ---------- 35
第 22 図　ガラス製品（３） ---------- 36
第 23 図　ガラス製品（４）・陶磁器（１） ---------- 37
第 24 図　陶磁器（２）・石製品 ---------- 38
第 25 図　陶磁器（３） ---------- 39
第 26 図　陶磁器（４）・瓦・硯 ---------- 40
第 27 図　陶磁器（５） ---------- 41
第 28 図　陶磁器（６）・瓦・石板・植木鉢 ---------- 42
第 29 図　砥石・石筆および古銭 ---------- 43

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

一般国道 52 号改築工事に伴い、平成８年２月に遺跡確認調査が実施され、その結果、江戸時代後期の陶磁器や金属製品などが出土したこと、そして東には富士川舟運の青柳河岸跡があったことなどから「町屋口遺跡」と名が付され、平成 10 年 5 月 20 日から同年 12 月 22 日にかけて本調査が実施された。

この調査では、青柳河岸に続く河岸御蔵道が発見されるとともに、江戸時代末から明治期にかけて描かれた絵図の内容のとおり「作場通ひ道」も確認された。なお、この「作場通ひ道」の下には、水路があったことも明らかにされた。

河岸御蔵道の両側では、明治頃の水田跡が確認され、さらに下層を掘削したところ、部分的ではあるが度重なる洪水のために埋まった江戸時代の水田面の一部が確認されるにとどまった。

また水路については、江戸時代末頃まで使用されていたものと思われ、洪水による砂によって埋没していた。この砂を掘り下げていくと水路内には、陶磁器類や木製品が出土し、また先端の尖った杭が多数見つかった。これらの杭は、水位が上昇したり下降したりすることによって木の心が残ったためと考えられる。その後、洪水によって埋まった水路の上に道として利用するために粘土を敷き、その両側には補強として丸太杭が打ち込まれていた。この道は、絵図から「作場通ひ道」であることが明らかにされた。

このような調査結果から富士川護岸工事では、青柳河岸跡の本体部分にあたる箇所であること、そして河岸御蔵道の存在などから、平成１５年度に施行面積 160,000㎡に試掘溝を３６本設定して調査が実施され、その結果、約 13,525㎡が適切な保存を要することとなった。

国土交通省甲府河川国道事務所と学術文化財課との協議を進めていく中で、遺構をなるべく残す方向で工事施行方法など変更を行い、今回の工事箇所での最終的な面積は 2,250㎡の発掘調査となった。

第２節　調査までの協議と調査経過

調査実施前に、国土交通省甲府河川国道事務所、学術文化財課、埋蔵文化財センターと協議を進め、発掘調査を実施した。

平成１５年１１月１９日　試掘調査現地協議
平成１５年１１月２６日～同年１２月１６日まで試掘調査を実施
平成１６年　２月　　学術文化財課へ試掘調査結果報告書を提出
平成１８年１１月１４日　防災ステーション建設などに係る協議実施
平成１９年　３月　９日　青柳河岸跡発掘調査についての現地協議実施
平成１９年　４月２４日　青柳河岸跡発掘調査について事前協議実施
平成１９年　６月　４日～２２日　重機による表土掘削
　　６月２１日　安全管理点検日
平成１９年　６月２３日　作業員面接
平成１９年　７月１０日　現地に器材を搬入
平成１９年　７月１１日から発掘調査を開始
平成１９年　７月１９日　安全管理点検日
　　７月２４、２５日　調査区に測量杭設置
　　７月３０日　教埋文第３０６号にて学術文化財課へ９９条提出
　　８月１０日　安全管理点検日
　　９月１９日　安全管理点検日　石垣立面図委託実施

９月２７日　空中撮影委託実施　石垣の断面図の付け足しおよび器材の片づけ、発掘調査終了
１０月　教埋文第４８２号にて遺物発見通知および教埋文第４８６号にて発掘調査終了報告提出
平成１９年１１月　基礎的整理作業開始
平成２０年　３月　基礎的整理作業終了および学術文化財課へ実績報告書の提出
平成２０年　５月　報告書作成のための本格的整理作業開始
平成２０年　６月　本格的整理作業終了
平成２０年１２月　報告書の入校
平成２１年　３月　報告書刊行

第２章　地理的環境と歴史的環境

第１節　地理的環境

青柳河岸跡は、山梨県南巨摩郡増穂町青柳地内に所在する。

増穂町は、山梨県の南西部で、甲府盆地の南端に位置し、町の総面積は65.17ｋｍ^{2}であり、86％が林野に占められている。また、大きく分けて西部の山間・丘陵地と東部の平野部からなり、西部の山間地には南アルプス自然公園に指定され、アヤメの群生地として知られる櫛形山(2051.7ｍ)をはじめ丸山(1910.3ｍ)・鳥森山(1907.6ｍ)・八町山(1521.1ｍ)など巨摩山地の高山がそびえる。東部の平野部は、町の東端に流れる富士川の支流である利根川と戸川の扇状地ないし富士川の氾濫原にとなっている。人口の多くはこの東部に集中し、商・工業の発展や住宅地域の拡大が進んでいる。

青柳河岸跡は、富士川の右岸に位置し、この富士川は、源を南アルプス北部の甲斐駒ヶ岳（２，９６６ｍ）北西から八ヶ岳裾野の峡谷を流下し、大武川、塩川、御勅使川などを合流させ、さらに甲府盆地南部で甲武信ヶ岳（２，４７５ｍ）を水源とする笛吹川と合流し、その後、山間部をぬって日本一深い湾のひとつの駿河湾に注いでいる。

その流域は長野県・山梨県・静岡県の三県にまたがり、流域面積３，９９０㎢、幹川流域延長１２８㎞で全流域のうち約９０％は山地である。また富士川は、最上川、球磨川とならんで日本三大急流の一つに数えられるように河床勾配は急で直轄区間の河口から韮崎市武田橋まで約８５ｋｍの平均河床勾配は１／２４０となっている。

さて、本遺跡のある青柳地区は、増穂町の南東部にあたる。西部の国道５２号線周辺は、商業地・居住地が広がり、東部は水田が広がる農業地域となっている。東端には釜無川と笛吹川が合流してできる富士川があり、駿河湾に向けて甲府盆地内の水を排出している。周辺は甲府盆地の最低所にあたり、標高は２４２ｍほどで、古くから多くの水害にさらされてきた地域といえる。

第２節　歴史的環境

増穂町内での遺跡は、現行の遺跡台帳で４０遺跡あまりとなっていて、西部の山地、丘陵山裾部、東部扇状地内の涌水列に集中している（遺跡名の次に時代その次にある（ ）、または遺跡名の次にある（ ）の番号は第１図の遺跡番号と一致させてある)。

山地では、平林大平遺跡（縄文・平安）(1)、平林向林遺跡（縄文）(2)、小室菖蒲池遺跡（縄文～古墳）(3)、小室檜平遺跡（縄文～古墳）(4)、高下下高下遺跡（縄文～弥生）(5)などが知られている。いずれも丘陵の段斜面を利用した縄文時代中期を中心とした住居跡や土器・打製石斧・石棒等が発見されている。

丘陵山裾部としては、春米北山遺跡（縄文･古墳）(6)、春米上平遺跡（縄文～古墳）(7)、春米中尾田遺跡（縄文･弥生）(8)、大久保広見遺跡（弥生）(9)、最勝寺平野遺跡（縄文～古墳）(10)、最勝寺西の入遺跡（縄文～古墳）

(11)、最勝寺大堀田遺跡（縄文・古墳）(12) などが知られているが、多くは縄文から古墳時代もしくは縄文から弥生時代の複合遺跡である。中でも、弥生時代～古墳時代の集落跡が発見され、一部に火災で焼失された住居が確認されている最勝寺平野遺跡は興味深い。また、弥生時代末～古墳時代初頭の集落跡や縄文時代早期末の条痕文土器、古墳時代前期のＳ字状口縁台付甕等が発見された大明神遺跡（縄文～古墳）(13) が知られている。その他に、権現堂遺跡（平安）(14) は、泥塔焼成遺構や泥塔が出土し、中世の仏教遺跡として注目されている。

東部扇状地内の涌水列に沿って分布するのは、小林竹重遺跡（弥生・古墳）(15)、安清の池遺跡（弥生・古墳）(16)、長沢平池遺跡（弥生・古墳）(17)、長沢長池遺跡（弥生・古墳）(18)、大椚遺跡（弥生・古墳）(19)、青柳遺跡（弥生・古墳）(20) などがあるが、ほとんど弥生～古墳時代の遺物の散布地で、その時期水田開発に伴い、より利便性ある水源を活用できる土地を求めた結果と窺える。また、最勝寺地区、春米地区の扇状地端部には古墳がまとまって築造されている。最勝寺地区では大塚古墳 (21)、鎌塚古墳 (22)、馬門古墳 (23)、無名塚１(24)、２号古墳 (25) などからなる古墳群が分布し、春米地区には、銅鏡や勾玉の出土が知られ、５世紀代の築造とされる法華塚古墳 (26) をはじめ、狐塚古墳 (27)、塚穴古墳 (28)、二十三夜塚古墳 (29) などが確認されている。古墳時代後半有力集団が春米・最勝寺両地区にそれぞれ分かれ、権力争いをしていたのではないかと想像が膨らむ。

増穂町以外では、本遺跡近隣の市川三郷町にある縄文時代中期の集落跡が発見されている宮の前遺跡（縄文）(30) や弥生～鎌倉時代の水田跡や弥生時代後期の土器片、動・植物遺存体が出土している大師東丹保遺跡（弥生～戦国）(31)、鎌倉時代の水田跡や戦国時代末期の建物跡さらに江戸時代の村の跡が確認されている宮沢中村遺跡（鎌倉～近世）(32) が南アルプス市（旧甲西町）に存在する。

本遺跡である青柳河岸は、鰍沢河岸と黒沢河岸とともに甲州三河岸の一つであり、富士川開削後の水運の拠点となったところである。寛永十五年（１６３８）には米蔵が置かれ、市川代官支配下村の江戸廻米が扱われ、経済文化交流の大きな役割を果たした。また、河岸から荷揚げされた物資や人の輸送するための交通路として、現在の国道５２号は、かつて駿河と信州を結んだ「駿信往還」と呼ばれた主要道で、青柳の追分から荊沢宿を経て、韮崎に続いている。一方、追分から甲府方面に延びる道を「駿州往還」、荊沢宿から東の市川代官所へ延びる道は、「市川往還」と呼ばれた。さらに、青柳河岸対岸には河岸を結ぶ青柳の渡し（高田の渡し）が昭和の時代まで存在し、駿信往還から市川大門村方面に通ずる大事な通路の役割を果たした。

青柳河岸の下流には、三河岸の内の鰍沢河岸、黒沢河岸があった。鰍沢河岸は、甲府代官所支配下村の江戸廻米を扱うと共に、信州の諏訪藩、松本藩にも利用された。発掘調査は平成８年から数回行われ、御蔵台跡などの遺構や甲州金壱分判をはじめ、近世・近代の陶磁器やガラス製品などが出土している。

黒沢河岸は、「甲斐国志」によると、石和代官所支配下村の年貢米を扱い、田安家（徳川八代将軍吉宗の次子宗武）の御米蔵もあったようである。「ハナグロ船」と呼ばれ、他の河岸船と識別するため船先を黒く塗ったと記述されている。

この時代の遺跡になると、青柳地区で本遺跡の西側、富士川の氾濫原に立地する町屋口遺跡（近世・近代）、藤田池遺跡（近世・近代）がある。両遺跡とも、一般国道５２号線（甲西道路）改築工事に先立ち、町屋口遺跡が１９９８年度、藤田池遺跡が１９９８年度と２００２年度の２回、山梨県埋蔵文化財センターによって発掘調査が実施された遺跡である。江戸時代末～明治時代における水田跡や水路跡・杭列などが検出されているが、町屋口遺跡では青柳河岸に通ずる「作場通い道」（青柳村絵図参照）の保護施設と思われる杭が検出され、道の上面には小砂利などが敷かれ堅く踏みしめられた状況が伺えた。なお、この「作場通い道」の下には、水路が形成されていたことが明らかにされ、水路内にはたくさんの杭が打たれており杭の外側には廃棄された舟板材で水路を囲い補強がなされていた。

明治時代は、水害の多い時代でもあり、日本はオランダの治水技術を導入し、連続する堤防を築きはじめた。特に明治１４．１８．２９．４０年は大洪水の年で、１８年には大洪水に際し釜無川の大改修工事が行われた。明治２９年には、信玄堤が破壊されたほどの洪水があり、中でも明治４０年の出水では、富士川流域は壊滅的な損害を受け、笛吹川の川筋がこの時に変わって現在のような流路となった。

第1図　青柳河岸跡とその周辺遺跡（1/50,000）

増穂町誌によると元禄２年（１６８９）７月７日大洪水にて青柳河岸御米蔵、川積場並びにお蔵道破損、鰍沢河岸御米蔵流出。文政１１年（１８２８）富士川洪水、鰍沢地内浸水。慶応３年（１８６７）８月富士川洪水、鰍沢地内浸水。明治１８年（１８８５）６月２９日降雨、７月３０日大洪水にて鰍沢運輸会社一部流出、各地の堤防決壊。明治２４年（１８９１）１２月降雨のため堤防決壊、青柳家屋耕地へ浸水。明治３０年（１８９７）９月８日降雨により河川増水、坪川決壊、富士川満水となり青柳へ浸水。明治３８年（１９０５）８月戸川堤防決壊。昭和１０年（１９３５）８月豪雨にて戸川堤防決壊。９月降雨により富士川増水、鰍沢地内用悪水路の逆流と富士川堤決壊。昭和２０年（１９４５）９月豪雨のため戸川堤防決壊。昭和２９年（１９５４）９月、１４号台風により堤防決壊、戸川上流赤石鉱泉の前山崩壊し、１７万立法メートルの土砂が戸川へ流れ込む。昭和３４年（１９５９）８月７号台風により豪雨、富士川増水、１３日夜には定位置にある河川は逆流し、増穂町の北に位置する甲西町の宮沢は湖水化した、と書かれている。

このように、甲府盆地の西部から南部は、江戸時代から昭和時代にかけて河川の洪水が続いた。

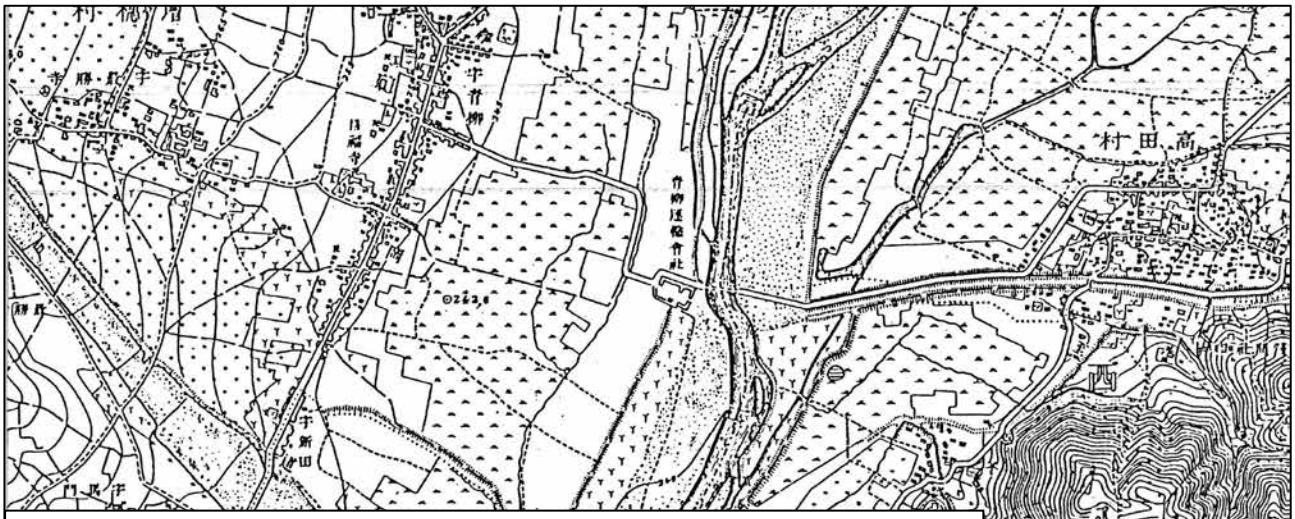
（図中の★が青柳河岸跡）

第３節　青柳河岸の歴史と関連事業および周辺の調査

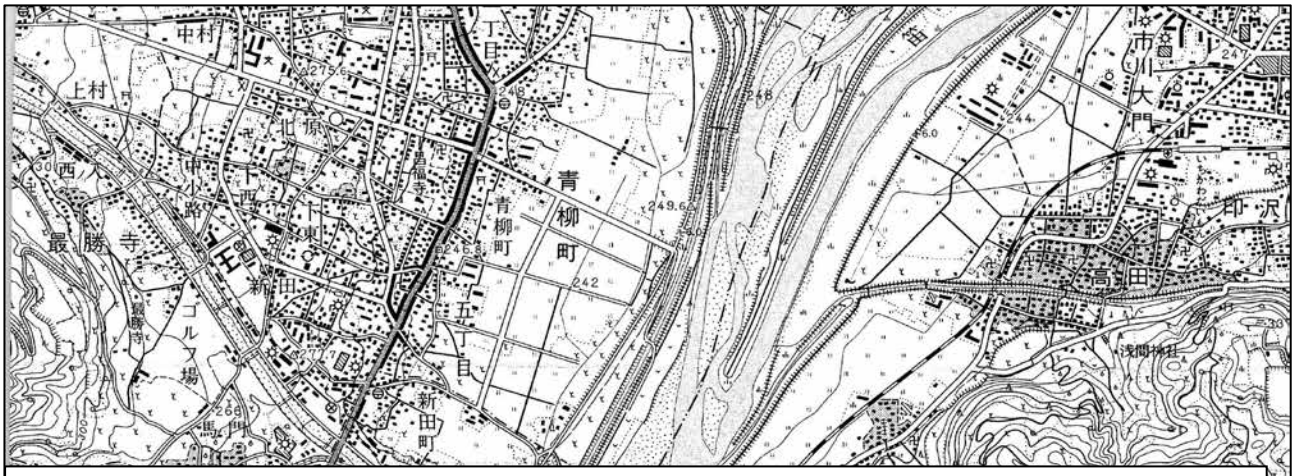
富士川水運については、慶長１２年、あるいは１６年という見解がなされ、慶長１９年頃から本格的な舟運が始まったとも考えられている。開始時期は明確に定まってはいないものの、慶長年間に開始されたことは事実である。ここで青柳河岸に関係する事象を掲げておく。

寛永１５年(1638)、青柳河岸に御米蔵が建つ（最終的に河岸は、東西 50.9m・南北 54.54m（面積約 2776㎡）の広さがあり、ここに東西 36m・南北 7.2m（建坪 260㎡）の御米蔵があったという)。

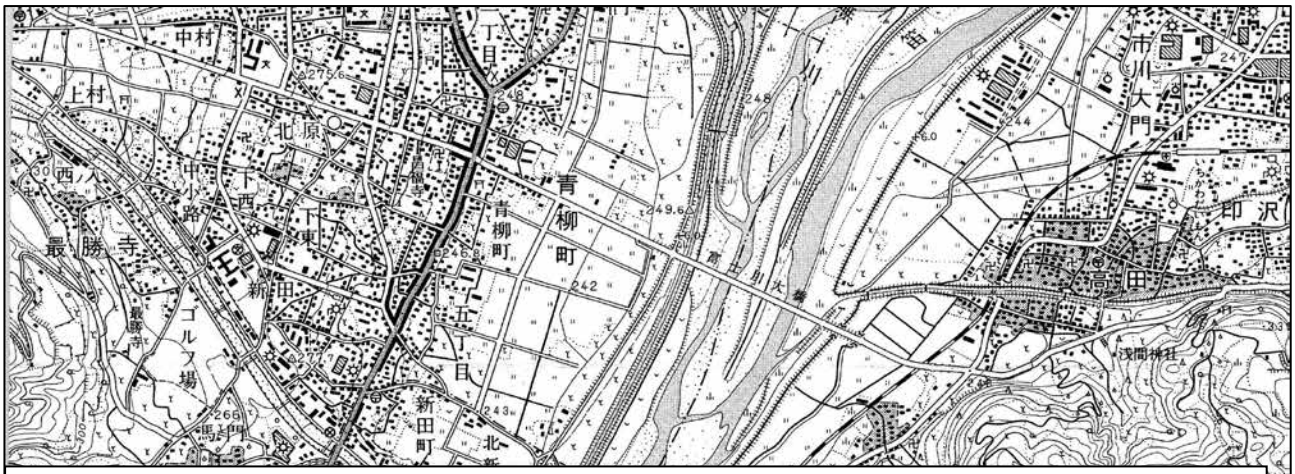
元禄　２年(1689)、大洪水のため、青柳河岸の御米蔵など破損する。



明治２１年測量　同２４年製版　同年９月２９日出版　大日本帝国陸地測量部　２万分之１



昭和４年測量　昭和４６年改測　昭和６１年修正測量　１．使用した空中写真は昭和６０年１０月撮影２．現地調査は昭和６１年５月実施　昭和６３年３月３０日発行　国土地理院　　１／２５，０００



昭和４年測量　昭和４６年改測　平成８年修正測量　１．使用した空中写真は平成６年９月撮影２．現地調査は平成８年３月実施　平成１０年部分修正測量　平成１３年１月１日発行　国土地理院　　１／２５，０００

第２図　青柳河岸跡および周辺の変遷地図

文化１４年(1817)、天神ヶ滝の大改修工事が行われる。
安政　１年(1854)、安政の大地震により、青柳の御米蔵など破損
明治　１年(1868)、青柳村およそ４９町歩冠水
　　２年(1869)、甲斐府を改め、甲府県となる。
　　４年(1871)、甲府県を山梨県に改める。
　　５年(1872)、富士川舟運の年貢米の廻送は終止符を打つが、舟運はなお続けられていく。
　　７年(1874)、富士川運輸会社設立
　　８年(1875)、富士川通船規則制定
　１０年(1877)、青柳地内の富士川堤防改修
　１８年(1885)、鰍沢河岸運輸会社の一部流出
　１９年(1886)、夏から富士川曳舟遡上に帆力を利用する。
　２３年(1890)、富士川通船営業取締規則が制定
　２６年(1893)、青柳運輸会社（青柳河岸）の発足
　３２年(1899)、馬車鉄道が、甲府から小井川・南湖を経て富士川舟運の起点鰍沢まで開通。芦川の下流に４００ｷﾛﾜｯﾄの芦川第一発電所が建設される。
　３３年(1900)、芦川発電所より送電が開始され、市川大門町２８３灯と甲府市中央部に８８２灯に電灯供給が開始された。
　３６年(1903)、中央線が甲府まで開通し、青柳運輸合資会社は解散となる。御米蔵は３８年まで河岸に存在する。
　３８年(1905)、秋山源兵衛が富士川運輸会社廃止のとき払下げを受け４５日間かけて解体し、源兵衛の屋敷西側に移築された。
　３９年(1906)、２５０ｷﾛﾜｯﾄの芦川第二発電所を建設し、市川大門町（現在の市川三郷町）と甲府城東地域へ電力の供給区域が拡大される。
　４０年(1907)、甲府電力会社が、増穂町、鰍沢町に電力を供給。
　４５年(1912)、青柳村に初めて電燈がつく。
大正　９年(1920)、富士身延鉄道が富士・身延間開通。内務省直轄富士川改修工事着工（１２年継続）
大正１１年(1922)、富士川運輸会社（鰍沢河岸）が解散
大正１４年(1925)、青柳（秋山酒造店）に初めてラジオがお目見え
大正年間に富士川の土堤が大改修された。
昭和　３年(1928)、富士身延鉄道前線開通
昭和２８年度から五明川、横川の内水対策として五明合流調整工に着手し、昭和４２年度に完成
平成　９年(1997)、富士川大橋竣工
平成１０年(1998)、一般国道 52 号改築事業により増穂町「町屋口遺跡」と「藤田池遺跡」の発掘調査
平成１４年(2002)、「藤田池遺跡」第２次調査

参考文献

「増穂町誌（上・下)」、「山梨県の百年」有泉貞夫 2003 山川出版社、「鰍沢河岸跡」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第 148 集、「鰍沢河岸跡Ⅱ」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第 224 集、「鰍沢河岸跡Ⅲ」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第 235 集、「鰍沢河岸跡Ⅳ」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第 238 集、「鰍沢河岸跡Ⅴ」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第 245 集、「鰍沢河岸跡Ⅵ」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第 254 集、「町屋口遺跡」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第 177 集、「藤田池遺跡」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第 204 集、「甲斐の道づくり・富士川の治水」歴史資料集　建設省関東地方建設局　甲府工事事務所　平成元年、「富士川舟運遺聞」望月誠一　2007 年

第３章　検出された遺構と出土品

第１節　遺構

１　石垣（石列）について

発掘調査地点は、富士川（釜無川）と併走する五明川の右岸で、この河川に沿って 2,250㎡が調査対象範囲である。五明川の上流側から重機により遺構確認面までを掘削したところ、第３図のように調査区の上 1/4 の箇所で、ほぼ南東から北西方向に転々と石が並んでいることが確認された。

このため石の状況を明確にするために探査棒を刺して、石の方向や深さを調べた。当初、この転々と並んだ石は、畑などの境界として設けられたものと考えられたことから、石列として調査を行った。

データ　場所：調査区内の北東　位置：Ｇ－１３グリッド～Ｉ－１３グリッド（第４図参照）

　　標高：２４２．３０m前後　石列の長さ：約１１．６m　配された石の幅：１．００m前後

石列の状況を知るために、石列に直行する形で幅約 50cm、長さ約 150cm の試掘溝を設定し掘削したところ、数段に亘って石を積んだ状況が確認された。このことにより、土層図作成のためのベルトを４本設置し掘り下げを行った（第４，５図、写真図版第３図）。それぞれの区画は、東側から１区画（土層図ポイントＡ－Ａ′）、２区画（土層ポイントＢ－Ｂ′）・・・と番号を付し、西側を５区画（第４図、土層ポイントＥ－Ｅ′）とした。

調査の結果、石列として考えられた遺構は、石垣であることが明らかとなった。それは、第５図の土層図のとおり石が３段から４段積まれており、しかも石の面が北側を向いて構築されていたことから意識して石が積まれていたことによる。第５区画では、骨、陶磁器片が出土し、特に陶器片では、土堤状の高まりで見つかった破片と接合された。

土層状況は、１，２，４区画では南から北へ傾斜しながらの堆積が認められるものの、３区画では逆に北から南への堆積状況が窺える。そこで、第４図のように上流側（北方向）に試掘溝を延長して調査したが、土層堆積は水平堆積を示すだけであった。なお、４区画の堆積は、石垣が破壊された後の堆積であり、南から北へ土砂が流れ込んだものである。このことから、石垣を境としてその前面には何もなかったことを意味しているものと思われる。また、石垣の裏に用いるグリ石は非常に少なく、確認されたグリ石の状況から石垣の高さもあまり高くはなかった可能性がある。

９月１９日、石垣の積み方記録のため、委託業務により写真実測のための撮影作業を行う。

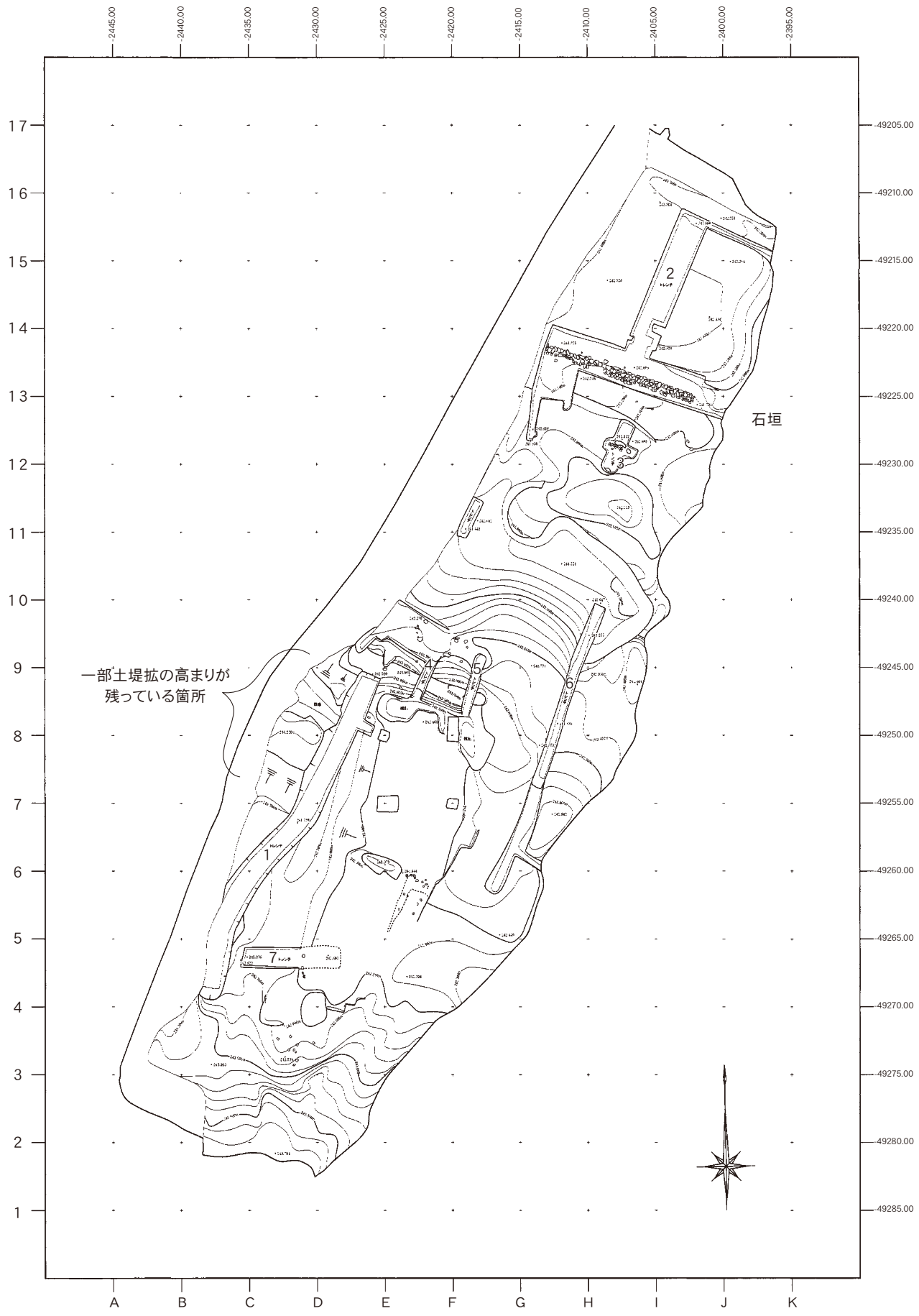
２　土堤状の高まりについて

土堤状の高まりは、調査区の中央より南側に位置し、南東から北西方向に延び、台形状を呈する。土堤状を断ち割った箇所での土層図面（第８図 Ｂ－Ｂ′）は、Ｂ′側（南側）において土堤の高まりから落ち込んでいく状況が認められる。

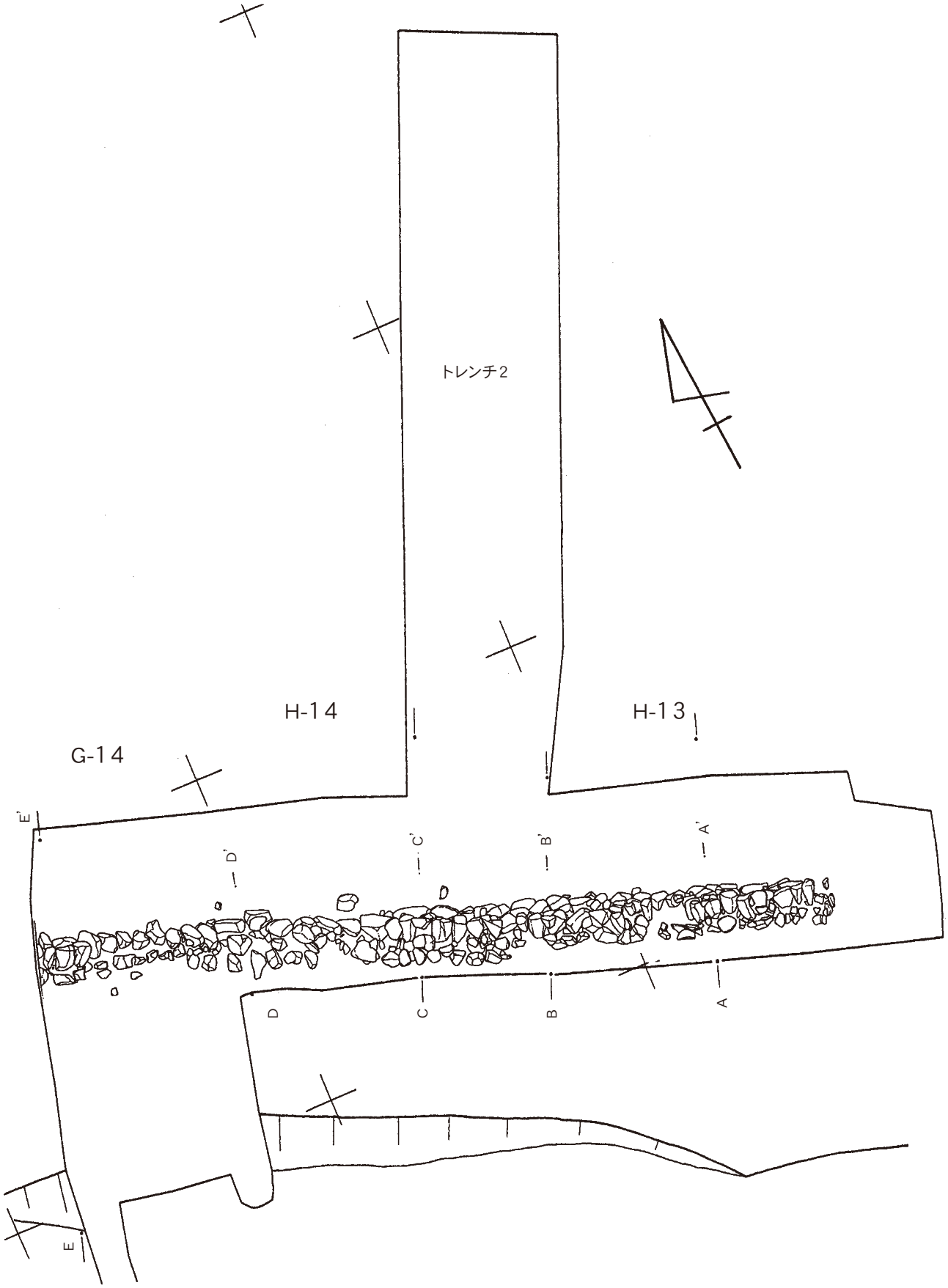
第Ⅷ層から上層にかけての層については、埋め立ての層として捉えられる。また全体の堆積状態は、土堤の高まりを構築した砂層とその下に硬く締まった小砂利を伴う層（道として構築されたⅩⅦ、ⅩⅧ、ⅩⅨ層の上面）が３面確認された。

しかし、道を構築した各面は、土堤状の高まりを構築した時、或いはそれ以前に削り取られたものと思われる。第７図は、土堤状の高まりを掘り下げた図であるが、最上層の道は両側が削り取られ痩せ細った道の幅しか残されていない。これは、第１８図の土層堆積図で、Ⅶ、Ⅷ、Ⅸ層を中心として以下が道を構築した層で、その廻りの土層は削られた状況を示している。また、すぐ南隣（第７図）では、掘削を受けた痕跡が認められる。

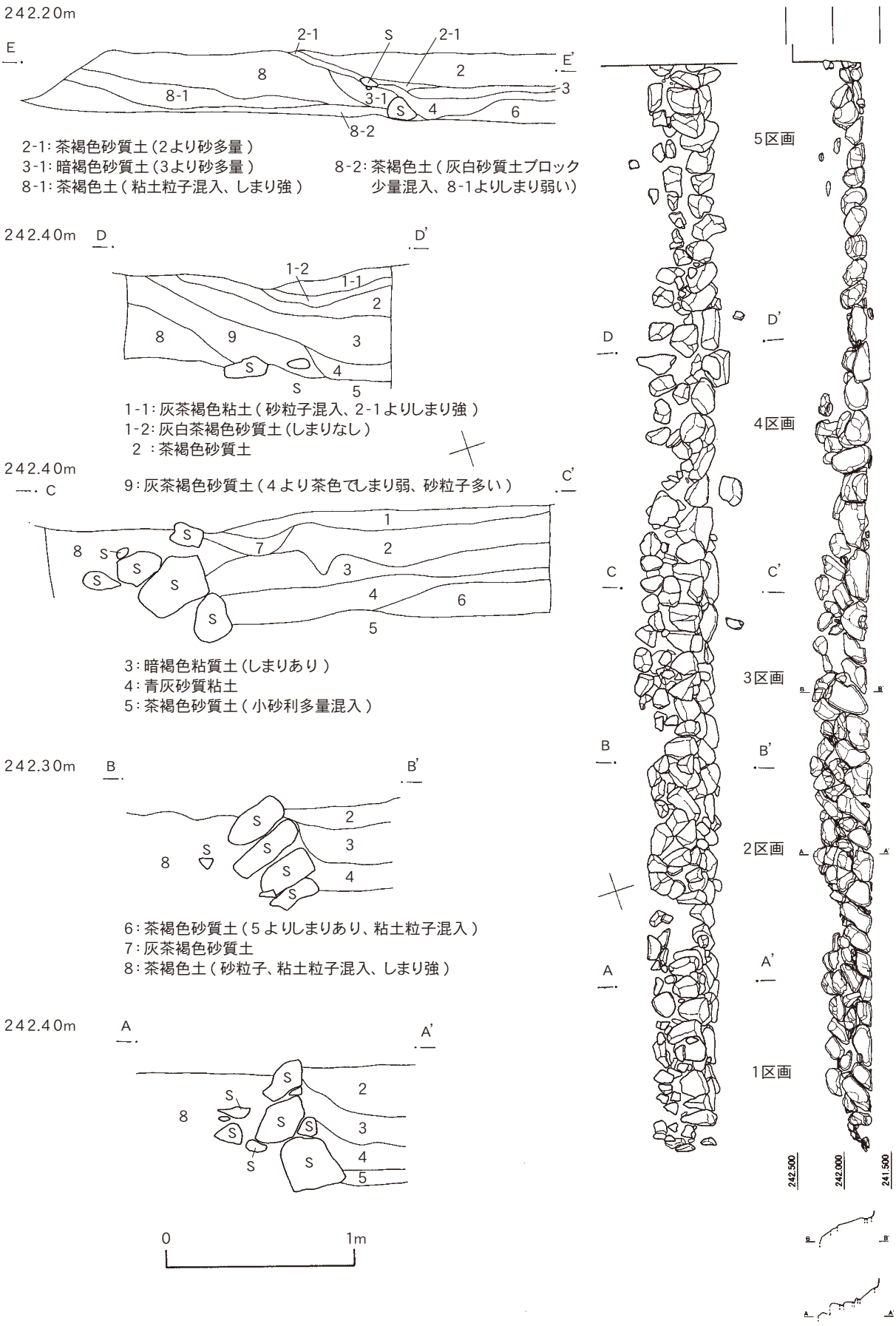
結果として、３面存在していた道の跡は、土堤状の高まりを構築する際に、大幅な攪乱を受け削られたものと思われる。特に最下層にある道については、この面まで攪乱が及んでいたため道の広がりを確認することができなかった。攪乱の性格および範囲については不明であり、この掘削による攪乱が行われた時期については、明治



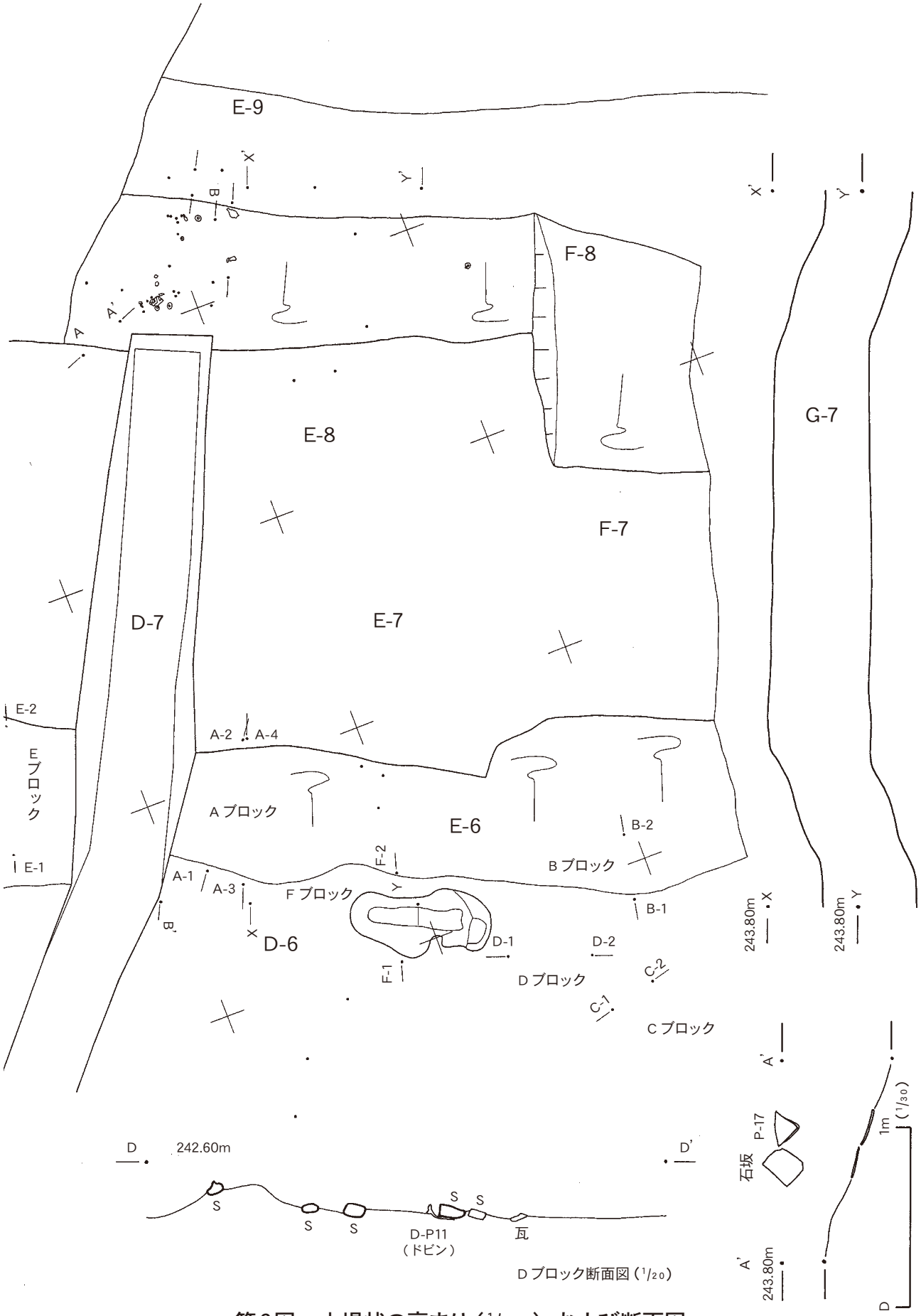
第3図　青柳河岸跡遺構全体図（1/400）　1～7はトレンチ番号を示す。



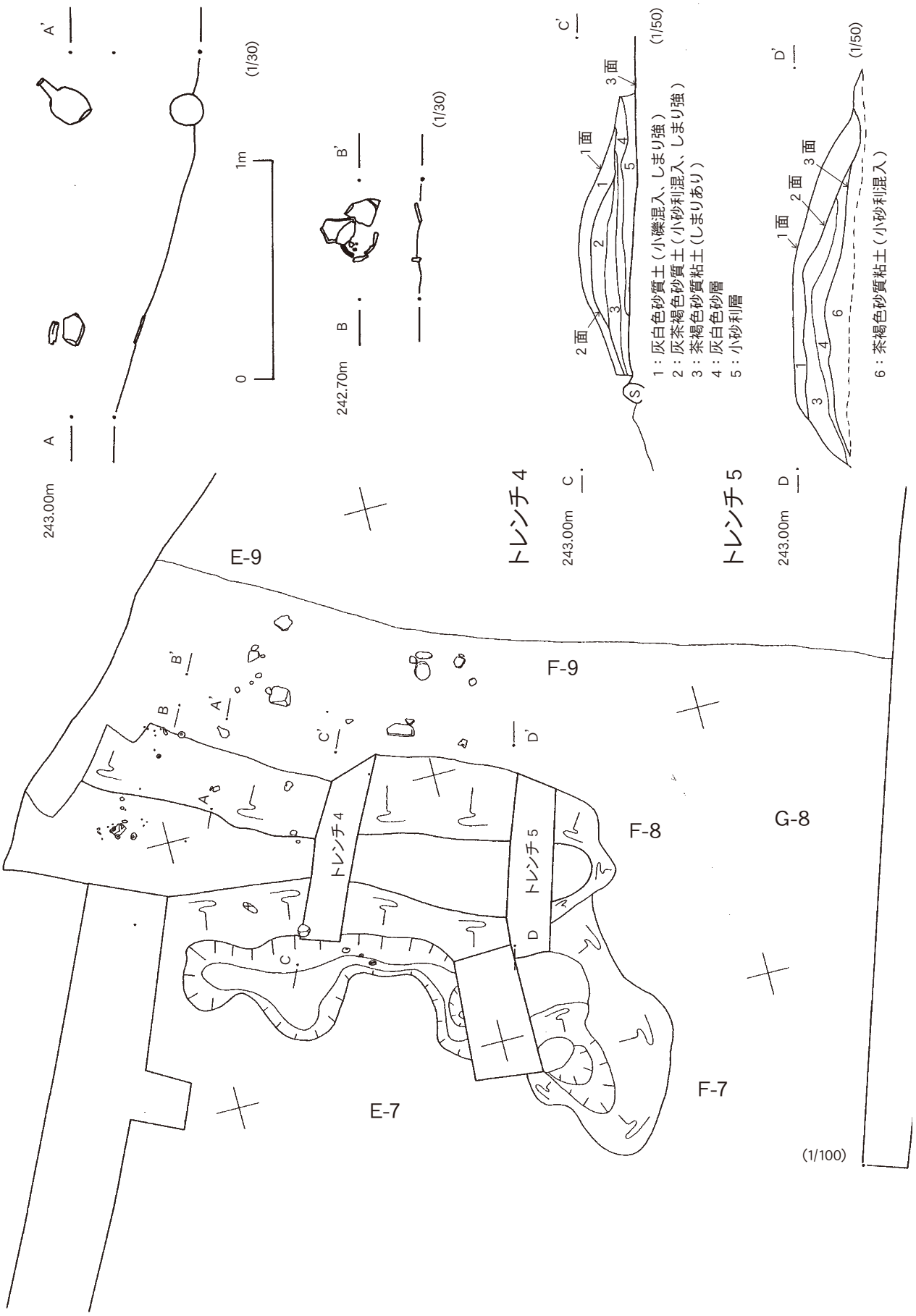
第4図　石垣の全体図（A～E は土層図のポイント）（1/80）



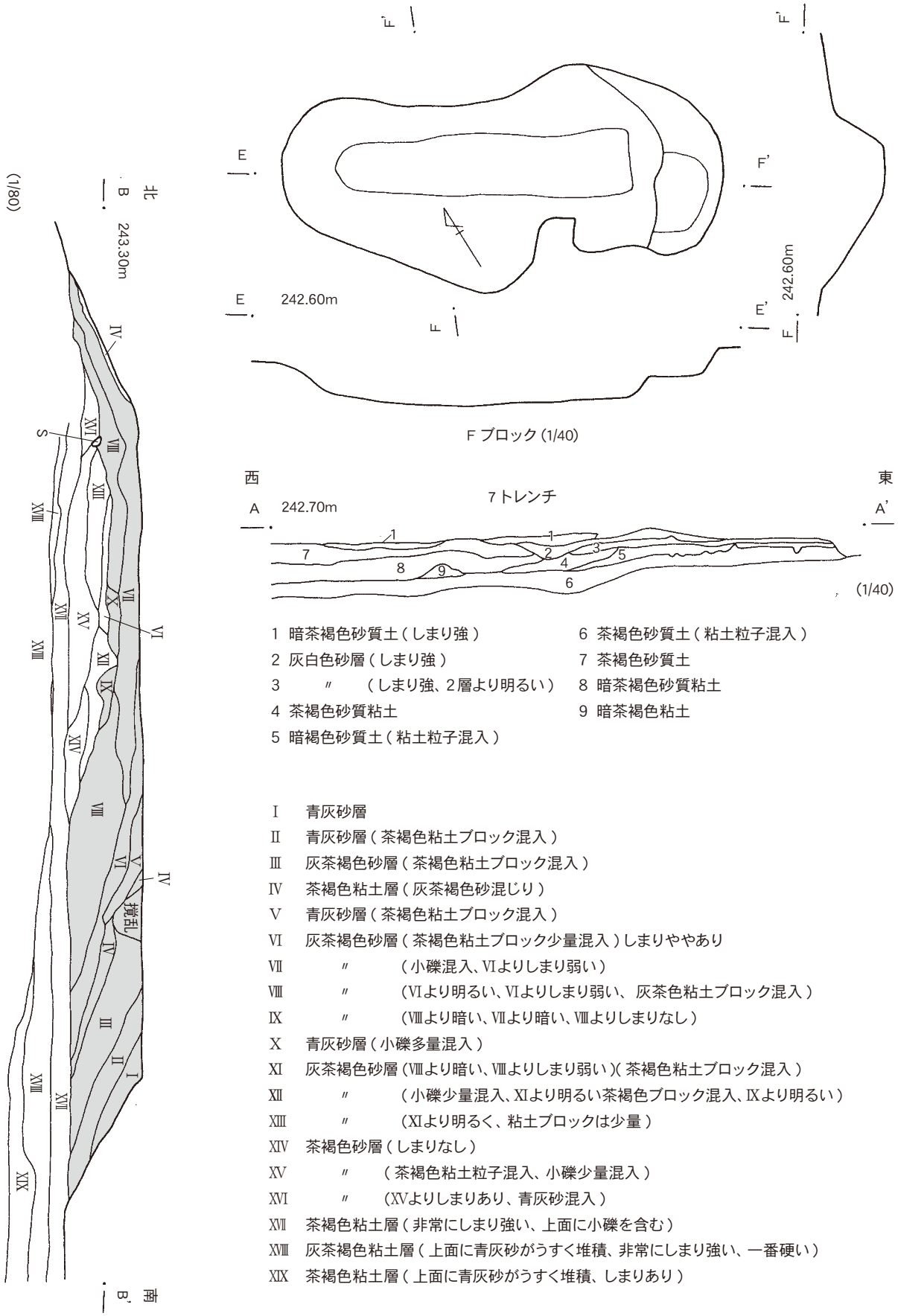
第5図　石垣平面図（1/60）・立面図（1/60）および土層図（1/30）



第6図　土堤状の高まり（1/120）および断面図



第7図　土堤状の高まりの下層の状況図（1/100）・断面図（1/30）および土層図（1/50）



第8図　土堤状の高まり土層図・Fブロック平面・断面図・7トレンチ土層図

３６年に会社が解散し、明治３８年に秋山源兵衛氏が御米蔵の払い下げを受けて移築された後のことと思われる。
データ　場所：調査区内の北東　位置：Ｃ－６，Ｄ－９グリッド～Ｆ－６，Ｇ－８グリッド（第３，６図参照）
標高：２４３．７０ｍ前後　土堤状の長さ：１７ｍ前後　土堤状の幅：１４．８０ｍ前後
土堤状の高さ：１．２０ｍ前後

第２節　各ブロックの出土品について

Ａブロックについて（第６，９図、図版４）

第６図Ｅブロックの東隣ポイントＡ－１，Ａ－２，Ａ－３，Ａ－４の間にあり南斜面に位置する。

陶磁器類などは、広がりを見せず一カ所から捨てられ、斜面に沿って流れ落ち込んだ状況が窺える。ガラス瓶類は、少ない。時期を知る手がかりとして、碍子が見つかっている。これらの出土品は、青柳河岸跡に伴うものではないため、記録として写真撮影と標高のみに留めた。よって、下層からの出土品については、写真撮影および標高等の記録は行わなかった。斜面上と下とのレベル差は１．１２ｍ前後である。

Ｂブロックについて（第６，10 図、図版４）

第６図ポイントＢ－１，Ｂ－２の間にあり、南斜面の裾に近い場所に位置する。陶磁器類、薬瓶、化粧瓶などがある。手前の洗面器は、診療所や病院でよく見かけた白色の鉄製品である。斜面上と下とのレベル差は４０ｃｍ前後である。

Ｃブロックについて（第６，11 図、図版４）

第６図ポイントＣ－１，Ｃ－２の間にあり、出土物は平坦な場所に存在する。Ｐ－３とＰ―７は接合し、ほぼ完形となった土瓶（第２４図Ｃ－Ｐ－７）がある。出土物のＰ－１とＰ－７の比高差は、２１ｃｍ前後である。このほか、薬瓶や湯呑などがある。

Ｄブロックについて（第６，12 図、図版４）

第６図ポイントＤ－１，Ｄ－２の間にあり、土堤状の斜面を下った平坦な場所に位置する。ここでは、他のブロックと異なり礫が多数存在し、礫のない場所から陶磁器類、石板（Ｐ－10）、碍子（Ｐ－12）などが点在している。

出土物の鶯徳利（Ｐ－９）については、底外面に登録新案４８８９４号が記載されている。出土物の高低差は、わずか８．４ｃｍである。

Ｅブロックについて（第６，13 図、図版４）

第６図ポイントＥ－１，Ｅ－２の間にあり、土堤状の高まりを断ち割った西側に位置する。出土物は、斜面に沿って下方へ流れている。ここのブロックでは、液体を入れた陶器製品（Ｐ－５２）、ビン類、湯呑、皿などが見つかり、特に商店の宣伝用としてつくられた皿などがある。この皿は、地域を特定できる商店名入りで、「青柳町一力萬屋醸造店」と記載されている。斜面上と下とのレベル差は１２４ｃｍ前後である。

Ｆブロックについて（第６，８図）

第６図ポイントＦ－１，Ｆ－２の間にあり、楕円形に掘削された穴の中に薬瓶、ガラスビン、湯呑などが詰め込まれ、明らかに廃棄のために行われたものである。さらに、その穴の中には、ゴムベルトのようなものまで詰められていた。掘削された穴の規模は、長径３．１０ｍ、短径１．４０ｍ、深さ３４ｃｍ前後である。

さて、これらの出土物は、土堤状の高まりがつくられてから、ここに運ばれたものと思われることから、この土堤の時期を考える上で好資料となる。そこで、これら出土物の時代を検証し、土堤状に盛られた遺構がいつ頃なのか検討してみたい。

まず、増穂町青柳にある商店の宣伝用の商品であるが、Ｅブロック出土の徳利（第 25 図）、皿（第 15、18、19 図）、猪口、茶碗などがあげられる。

増穂町誌 p1043 醸造業の項に、明治６年頃青柳の井筒屋・井上家では安政頃肥後出身の名力士に「不知火」というのがあり、同力士を贔屓にしていたことからあやかって名付けたという。明治１７年６月商標条例および商標登録手続きが布告、その１０月１日から施行され、明治２７年には「不知火」の商標は登録され、専用権を

得ており、このころから清酒の銘柄が重要視されてきた。（第 25 図　E- 一括２）

明治６年、青柳の萬屋中込家では初め「松が枝」と名付け、大正頃は「一刀正宗」（第 15 図・図版５E- 一括４写真裏面に、青柳町一力萬屋醸造店と記載され、表面には「ｲﾁﾘｷ　正宗」と記載されている。この出土品から「一刀正宗」は「一力正宗」の誤りと思われる。）といい、「楊貴妃」などともいったが昭和４年から雅楽の中から「春鶯囀」を採して現代に至った、ということである。

C-P-17（第 20 図）は、カルピス製造会社の社名があり、茶色透明の飲料ビンである。大正５年（1916）に三島海雲が乳酸菌飲料の工業化に成功し、醍醐味合資会社を設立して「醍醐味」を発売した。大正８年（1919）には、「カルピス」と改称した。大正９年（1920）には 180ml 入りの小瓶（ねじり瓶）、大正１４年（1925）に新徳用瓶（630ml）、大正１５年（1926）に中瓶（330ml）が発売された。（『ガラス瓶の考古学』　桜井準也　2006）本瓶の栓は、王冠である。

D-P-9（第 24 図）は、鶯徳利である。徳利の底には、「登録新案 48894 号」の登録新案番号がある。

このほかに、乾電池３０本が一組となったバッテリーのようなものも見つかった（図版４）。また、碍子（家の中に配線するときに使われた陶器製のもの第 23、24、26、27 図）なども見つかっている。

碍子については、増穂町で電気が送電され始めるのは、明治４０年であるが、増穂町誌史料編によると明治４５年青柳村に初めて電燈がつくと記載されている。増穂町への送電については、明治３９年に２５０ｷﾛﾜｯﾄの芦川第二発電所が建設され、市川大門町と甲府城東地域へ電力の供給区域が拡大されており、第二発電所から供給されたものと思われる。

鰍沢河岸跡（第 148 集　本文 p70）によると、「大学目薬」は明治３０年代以降、「ロート目薬」は明治４２年以降（第 20 図）で、特に「山田安民」名（第 21 図）は大正９年発売とのことである。E-P-12（第 21 図）のサイダービンであるが、大正１１年に加富登麦酒、帝国鉱泉、日本製壜の３社が合併し、日本麦酒鉱泉となった（桜井準也『ガラス瓶の考古学』より）。

よって、ここに持ち込まれた時期は早くとも「ロート目薬」から明治４２年以降、碍子の存在から明治４５年以降、「山田安民」名から大正９年以降、E-P-12 のサイダービンが大正１１年以降、また、出征のための杯などは昭和１６年頃のものと考えられる。

このことから、土堤状の高まりは、昭和１６年ころまで使用されていた可能性がある。

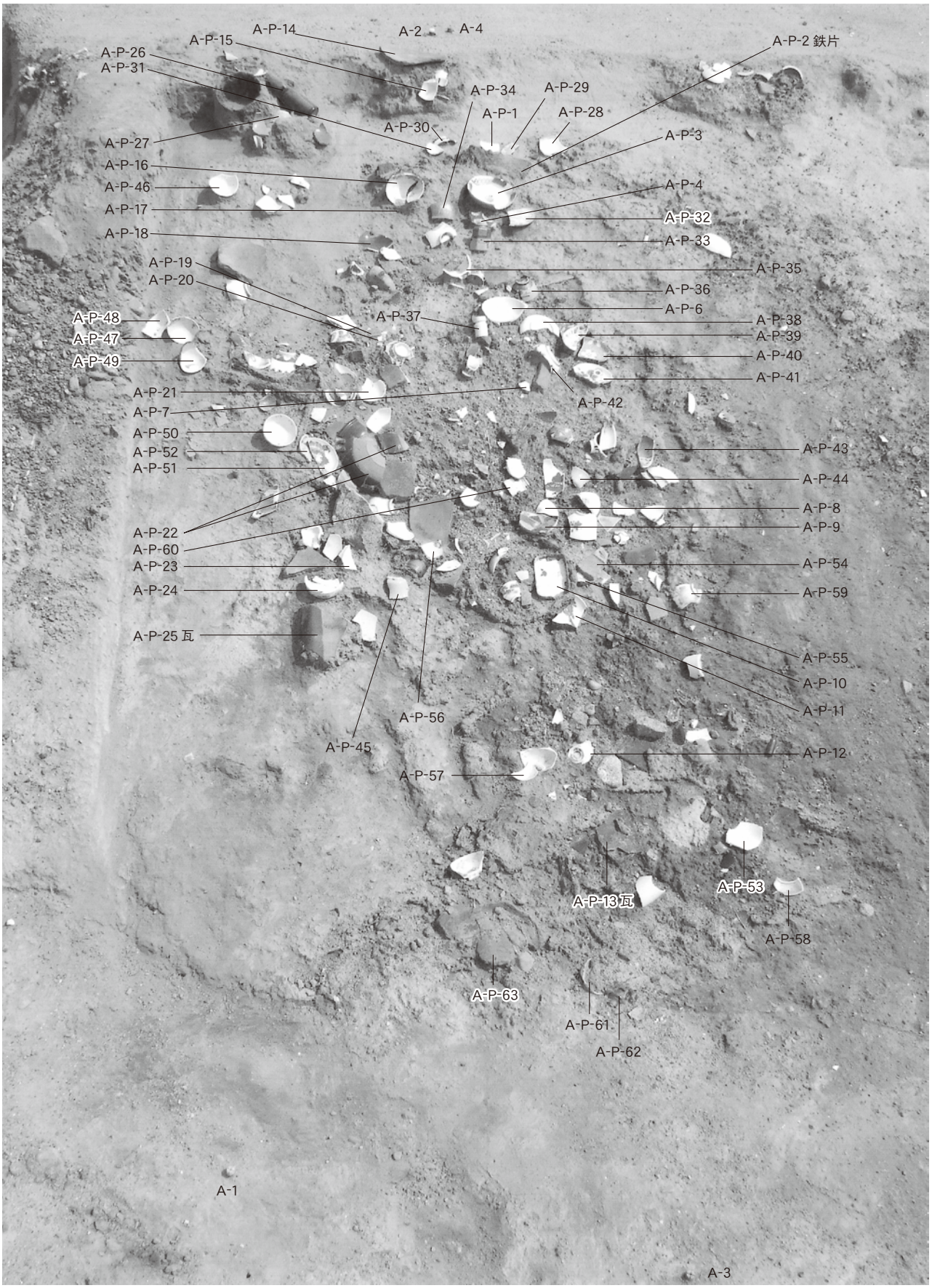
また、薬瓶については、蘆澤（または芦澤）醫院や回春堂醫院、久保内科醫院、横手醫院などもあり、増穂町誌 p291　第二節　保険施設の概況　を参照されたい。

第４章　まとめ

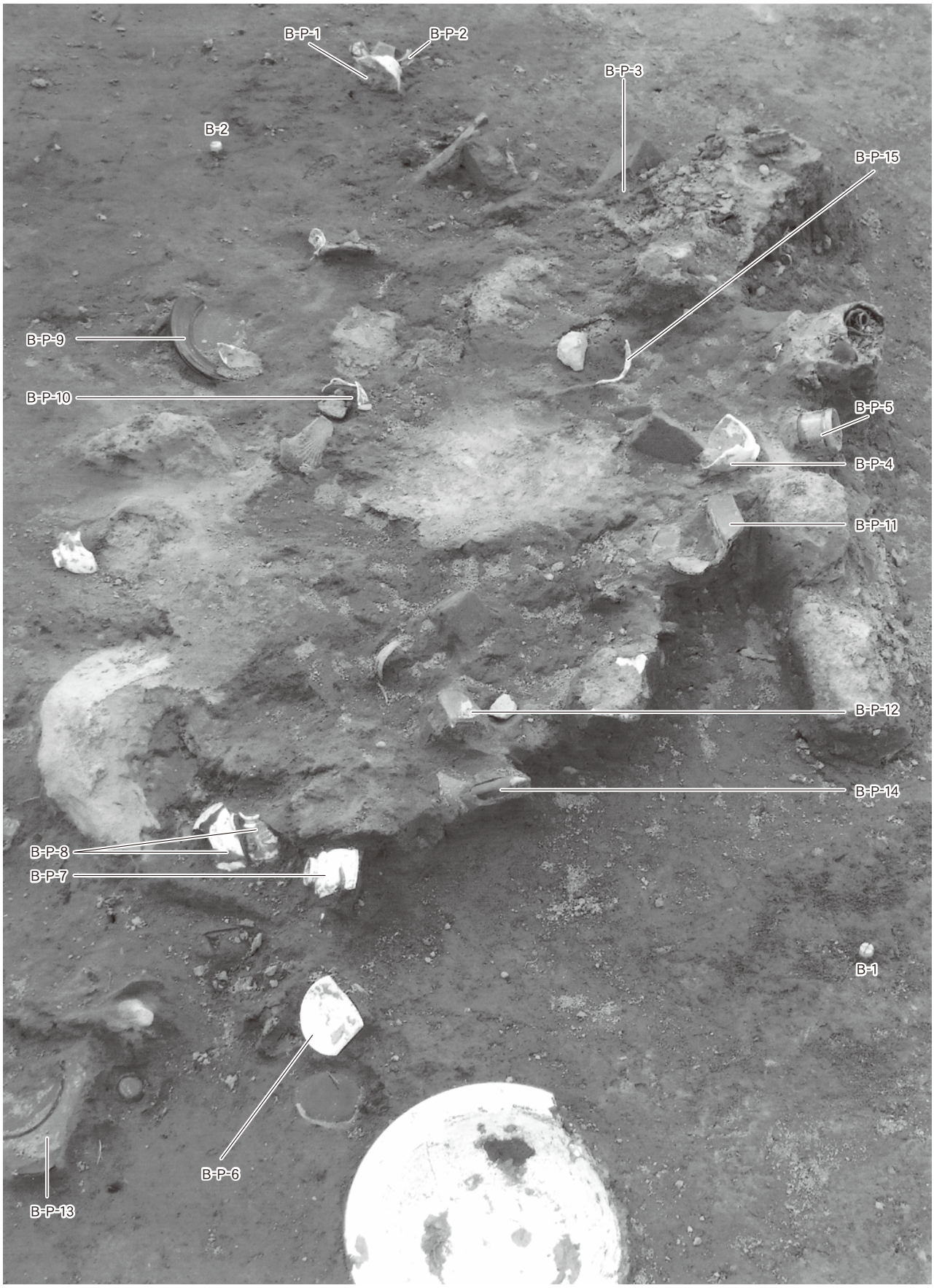
青柳河岸は、大正年間に富士川の土堤が大改修され、川が東に寄せられたため河岸跡は今河川敷となっている。そして平成１５年度に実施された試掘調査によりこの河川敷からは、礎石と思われる石が見つかっていることからも明らかである。また、今回の調査区の東側には五明川が流れており、この川は昭和２８年度から内水対策として五明合流調整工に着手し、昭和４２年度に完成したものである。

本遺跡では、土堤状の高まり、石垣などが発見されたが、青柳河岸に伴うものではないことも明らかにされた。しかし、土堤状の高まりの下には、「青柳河岸」が繁栄していた頃の道が３面存在していた。

このような結果から、青柳河岸の本体は、中州状となった場所にその存在が明らかとなり、河岸本体から町並みへと続く道も明らかとなった。中州となっているこの場所に青柳河岸跡が存在し、この中州に工事などが行われる際には調査を必要とし、その時はじめて青柳河岸の全貌が見えてくるのではないかと思われる。

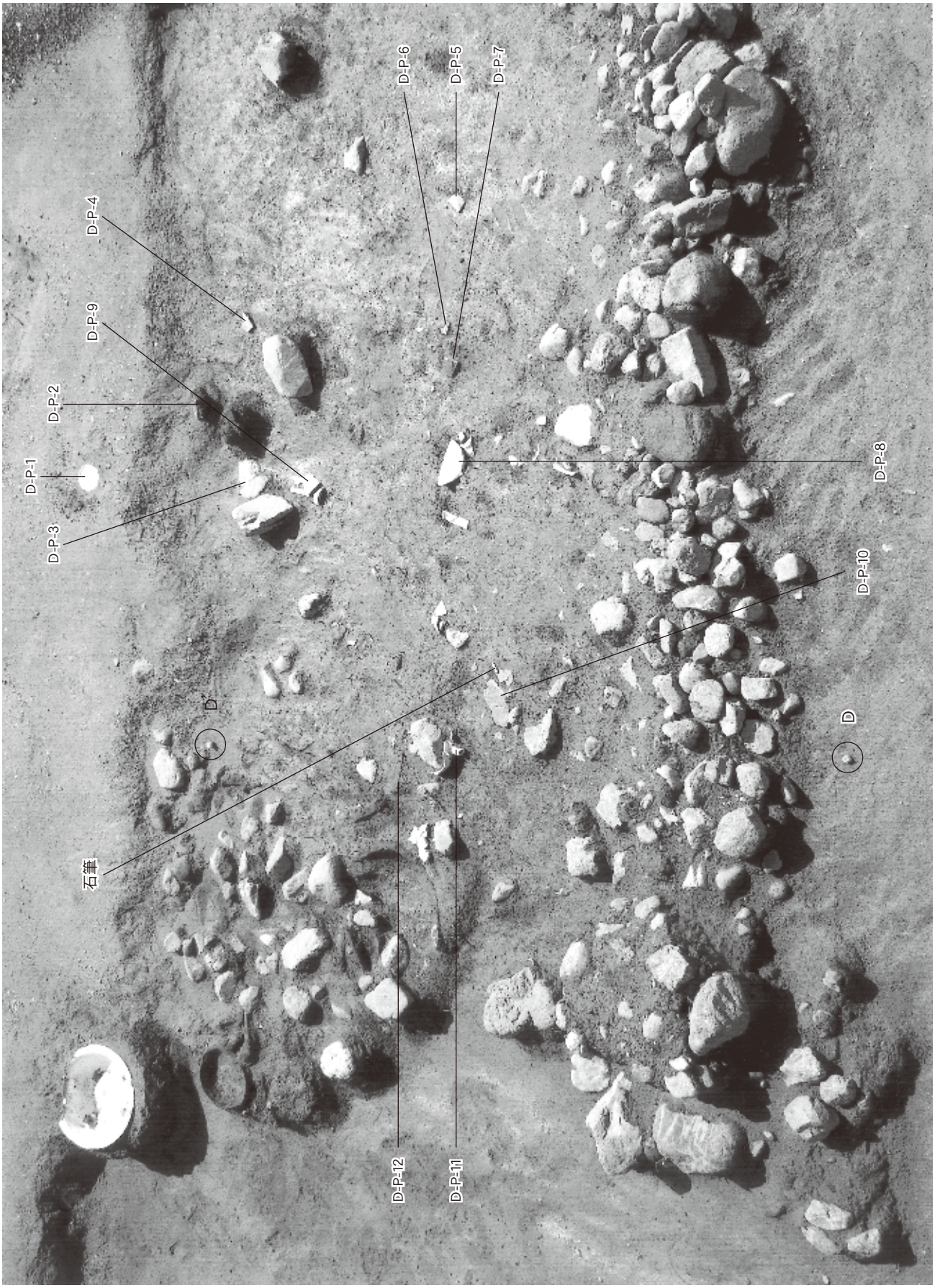


第9図　Aブロック　出土状況



第10図　Bブロック　出土状況

第11図　Cブロック　出土状況



第12図　Dブロック　出土状況

第13図　Eブロック　出土状況

表ー１

ブロック	番　号			A＝口径他	B＝底径他	C＝器高他	D＝幅 / 横他	色	形	備考	挿図
Aブロック	番		号	A	B	C	D	色	形		番号
皿	P	ー	3	13.7	7.6	3.5			蛇の目高台・ほぼ 1/1	見込みに寿	１４図
茶碗	P	ー	6	(11.4)	4.2	4.5		うぐいす色	1/2 現存	絵付け	１４図
皿	P	ー	9	ー	(8.0)	(1.5)			手描・蛇の目		１４図
鍋	P	ー	17	16.4	9.3	7.3	18.2	鉄釉	3/4 現存	A-P-22 と接合	２３図
酒坏	P	ー	21	7.4	3.0	3.0		乳白色	口縁部は約 1/2 現存	3/5 現存	１４図
ラムネビン	P	ー	26	2.0	5.0	18.9		薄緑色半透明	明治 20 年に徳永硝子工場が国産玉ラムネ瓶を製造		２０図
湯呑	P	ー	27	7.6	3.6	4.1			銅板転写	端反	１６図
茶碗	P	ー	28	11.4	4.8	5.8			外面に馬の絵、内面は菱形文	端反	１４図
急須	P	ー	30		5.4	6.0	11.4	梅、竹の絵	手描、ほぼ 3/4 現存	P-30+P-42+P-57 接合	２３図
皿	P	ー	32	(12.0)	(6.9)	1.9		鶴・亀の絵柄	型紙、1/4 現存		１６図
湯呑	P	ー	33	5.8	3.8	6.9			1/2 現存		１４図
湯呑	P	ー	36	8.4	3.4	4.1			P-33 と胎土が同じ	陶器	１４図
碍子	P	ー	37	3.4		5.0		乳白色	1/1 完形		２３図
皿	P	ー	38	11.0	6.4	2.0		葉（青色）、花（緑色）	銅板転写、ほぼ完形	A-P-41 と接合	１６図
皿	P	ー	40	10.4	6.0	2.1		緑色	銅板転写	桜と蝶	１６図
湯呑	P	ー	45	8.0	(2.8)	4.2			外面底は桜の陽刻、1/2 現存	端反	１４図
湯呑	P	ー	46	8.0	3.6	4.7		コバルトと薄茶色で絵付け	2/3 現存、武士と富士山	高台に「米山」の文字あり	１４図
湯呑	P	ー	47	8.1	3.8	4.3		菊（コバルトブルー）の絵柄か	蛇の目高台・型紙	口縁部一部欠損	１６図
湯呑	P	ー	49	(7.6)	(3.6)	4.5		枠に囲まれた鳥の絵柄	約 1/2 現存	底に「峰月」と文字あり	１４図
皿	P	ー	52		9.0	(4.1)	8.9	うぐいす色	蛇の目高台	焼き接ぎあり	１４図
皿	P	ー	55	(11.0)	(6.0)	2.2		内面に藤の花か	染め付け		１６図
インクビン	P	ー	62	2.0	4.0	5.2		青色透明			２０図
蓋	P	ー	63	25.0	19.4	6.8	7.0	こげ茶色	火消し壺の蓋か、つまみに陰刻ありつまみに陰刻（土器製造　中巨摩	陶器、穴は４カ所か	２３図

表ー２

Bブロック	番　号			A＝口径他	B＝底径他	C＝器高他	D＝幅 / 横他	色	形	備考	
ガラス容器	P	ー	5	5.0	5.1	4.1		透明	6 角形、完形		２０図
小皿	P	ー	6	8.3	3.7	1.6		乳白色	1/2 現存		２３図
湯呑	P	ー	8	8.4	3.2	4.8		三重の塔、家、樹木の絵柄	銅版転写、1/2 以上現存		１６図
湯呑	P	ー	10	(8.1)	3.7	4.8		鳥と樹木	銅版転写、1/2 現存		１６図
薬ビン	B - 一括1			2.2	5.6	14.4		無色透明	型合わせ 200cc	蘆澤醫院	２０図
ガラス蓋	B - 一括2			8.0	5.2	2.0		青緑色半透明	瓶の蓋、完形		２０図
小皿	B - 一括3			(8.0)	3.6	1.9		乳白色	1/4 現存		２３図
ヘチマコロン	B - 一括4			1.8	3.8	10.9		緑色半透明	角ビン、化粧水瓶	大正４年に発売された	２０図
薬ビン	B - 一括5			2.6	3.6	8.3		茶色半透明	丸ビン、底に「50」のマークあり		２０図
ガラスコップ	B - 一括6			8.2	ー	(7.7)		口縁部付近は薄いピンク色	底欠損、1/2 現存		２０図
茶碗	B - 一括7			11.4	4.3	5.7		梅の花か	銅版転写	４区画に絵柄	１６図

表ー３

Cブロック	番　号			A＝口径他	B＝底径他	C＝器高他	D＝幅 / 横他	色	形	備考	
急須	P	ー	2	12.0	7.4	6.5	13.0	焦げ茶色	把手欠損	陶器	２４図
蓋	P	ー	3	8.4	6.0	2.7	1.8			陶器、P-7+ 一括が接合	２４図
皿	P	ー	4	11.0	6.5	2.3		人物２人（墨）	銅板転写、 1/2 現存		１６図
茶碗	P	ー	5	11.0	3.2	5.9			3/4 現存	P-10+ 一括	１４図
薬ビン	P	ー	6	2.7	7.0	20.0	内径 1.4	茶黄色透明	丸ビン、 完形		２０図
土瓶	P	ー	7	7.8	7.8	9.8	16.0	笹の絵柄		陶器、P-3 ＋一括が接合	２４図
蓋	P			8.4	6.0	2.7	1.8				２４図
鉢	P	ー	8	17.6	8.5	6.2		花の絵柄	口縁部波状、 浅い蛇の目高台	P-5 ＋ P-7 が接合	１６図
湯呑	P	ー	9	8.4	3.1	5.0		外面は青色で絵付け	完形	P-10+P-13 が接合	１４図
おろし器	P	ー	11	8.6	13.1	0.6		乳白色	3/4 現存	磁器	２３図
皿	P	ー	12	11.1	6.6	2.2		赤絵、 百人一首	銅板転写、 完形	「あしびきの　やまどりのおの・・・」	１６図
土瓶	P	ー	14	（８．０）	8.3	10.7	16.2		ほぼ完形		２４図
蓋	P			7.8		2.0	1.5	（Ｄ－Ｐ－１）			２４図
茶碗	P	ー	15	11.0	4.0	6.0		吹き付け、 白雪の富士山	ほぼ完形		１４図
小鉢	P	ー	16	11.4	5.2	5.3		鶴・亀・松・竹の絵柄	完形		１６図
カルピス	P	ー	17	1.4	3.7	14.0		茶色半透明	丸ビン、 完形	カルピス製造会社、 栓は王冠	２０図
薬ビン	P	ー	19	ー	2.6	(6.1)	3.0/1.8	コバルトブルー	楕円形、 口縁部欠損	神薬松の露、	２０図
ガラスビン	P	ー	20	内） 1.0/1.6	2.4	10.6		無色透明	瓢箪形・底は四角・上部は円形	ニッキ水瓶か	２０図
薬ビン	C - 一括１			1.6	3.7	8.0	4.0/2.4	無色透明	楕円形、 完形、 C-5-c-1	蘆澤醫院	２０図
薬ビン	C - 一括２			1.7	3.8	7.8	4.0/2.2	無色透明	楕円形、 完形、 C-5-c-2		２０図
薬ビン	C - 一括３			1.8	4.1	9.4	4.6/3.2	無色透明	楕円形、 完形、 C-5-c-3		２０図
ガラスビン	C - 一括４			(1.3)	1.7	(9.3)	2.5	淡緑色透明	口縁部欠損・型合わせ・底四角	ニッキ水瓶か	２０図
髪飾り	C - 一括５			9.2	3.7	0.1		濃茶色	透かし彫り		２３図
蓋	C - 一括６			6.8	5.0	2.1	1.9	茶黄色	1/2 現存	陶器	２３図
蓋	C - 一括７			6.8	4.4	2.2	1.3	濃焦げ茶色	1/2 現存	陶器	２３図
湯呑	C - 一括８			8.2	3.2	4.8		外面に渦巻きの絵柄	4/5 現存		１４図
湯呑	C - 一括９			7.9	3.7	4.7		花の絵柄（ピンク・黒）	銅板転写、 ほぼ完形	底に文字あり	１７図
湯呑	C - 一括 10			6.1	3.9	6.6		花の絵柄	筒形、 銅板転写、 完形	景文の文字あり	１７図

表ー４

Dブロック	番　号			A＝口径他	B＝底径他	C＝器高他	D＝幅 / 横他	色	形	備考	
茶碗	P	ー	3	11.8	(4.3)	5.1		富士山の絵柄	銅板転写・Ｐ－８と同一の絵柄	馬を引く人、 小屋、 杉など	１７図
茶碗	P	ー	8	12.0	4.1	5.2		富士山の絵柄	銅板転写・Ｐ－１と同一の絵柄		１７図
鶯徳利	P	ー	9		5.0	(11.1)		乳白色	底に登録新案 48894 号あり		２４図
石板	P	ー	10	(6.2)	(11.5)	0.4			粘板岩	石製品	２４図
土瓶	P	ー	11	(6.0)	6.2	8.1	13.4		1/2 現存	陶器	１７図
碍子（天井）	P	ー	12	7.0	5.2	2.0		乳白色	ほぼ完形		２４図
石筆	D - 一括１			ー	ー	(2.9)	0.5		蝋石	石製品	２９図

表ー5

Eブロック	番	号	A＝口径他	B＝底径他	C＝器高他	D＝幅 / 横他	色	形	備考	
湯呑	P	ー 3	8.0	3.7	4.6		外面に葉っぱの絵付け	ほぼ完形		14図
急須	P	ー 6	10.7	6.8	6.0	11.2	鉄釉	把手欠損	陶器	24図
ダイヤモンド	P	ー 7	2.0	5.7	27.0		茶色半透明	ﾇﾉﾋﾞｷｺｰｾﾝｼｮ	ﾀﾞｲﾔﾓﾝﾄﾞ印、サイダー瓶	21図
ビン	P	ー 8	2.5	5.9	23.7		緑色半透明	東京石川日進舎	花月、サイダー瓶	21図
ビン	P	ー 9	2.0	5.8	25.0		緑色半透明	底上げ	ワイン瓶か	21図
ビンの栓	P	9			3.1	2.7	乳白色	機械栓		24図
鍋の蓋	P	ー 10	16.2	13.2	4.6	6.0	鉄釉	完形	陶器	24図
皿	P	ー 11	20.8	13.8	2.7		絵付けあり、青	大明〇化年製	底に5コの目跡	15図
サイダー瓶	P	ー 12	1.8	6.0	24.4		緑色半透明	商標日本麦酒鑛泉株式會社登録	サイダー瓶、三矢のマーク	21図
皿	P	ー 13	7.8	3.2	2.1		薄茶色	糸切り痕あり	陶器	24図
蓋	P	ー 14	8.4	7.7	3.0	2.0	笹の葉の絵柄か	完形		24図
硯	P	ー 16	7.8	13.5	2.4			縁の大部分が欠損	石製品	24図
硯	P	ー 17	6.5	13.9	2.2				石製品	24図
茶碗	P	ー 20	10.8	4.2	5.8			銅板転写、口縁部 1/3 現存		17図
皿	P	ー 21	15.0	9.0	4.6			型紙・蛇の目、口縁部 1/2 現存		17図
湯呑	P	ー 25	5.2	4.1	6.1		絵付けあり	筒形		17図
蓋	P	ー 28	7.0	5.8	2.6	1.4		完形		25図
蓋	P	ー 31	7.2	6.2	2.3	1.4		完形		25図
蓋	P	ー 33	10.3		2.4	4.2	松竹梅	銅板転写、2/3 現存		17図
湯呑	P	ー 37	7.8	3.6	4.8		家の図柄			17図
湯呑	P	ー 40	8.5	3.7	4.7		多くの人物		鰍沢河岸跡Ⅱ第2分冊 P-4-1016	17図
皿	P	ー 41	10.5	6.3	3.2			銅板転写		17図
灯明皿	P	ー 42	9.4	1.9	4.2		薄茶色	ほぼ完形		25図
蓋	P	ー 44	7.0	ー	(2.0)	ー		つまみ欠損		25図
蓋	P	ー 45	6.4	4.6	2.7	1.3	赤絵付けあり	完形		17図
ガラスビン	P	ー 46	2.4	4.3	19.3		青色透明			20図
ビンの栓	P	46	-	-	3.1	2.1	淡緑色 46 の栓ではない	ねじ切りか		20図
湯呑	P	ー 47	7.9	3.6	4.6		富士山・松竹梅	蛇の目・銅板転写		17図
酒坏	P	ー 48	7.6	2.8	3.1				内面に「〇命」、外面「　」あり	25図
回春堂	P	ー 49	2.2	6.0	13.8		透明	回春堂醫院		20図
鉢	P	ー 51	20.8	10.3	6.9		絵付けあり、青と赤	磁器	焼成後、赤（蟹か）で絵付け	17図
甕	P	ー 52	9.5	-	(23.0)	32.0	焦げ茶色	液体を入れる容器		25図
猪口	E - 一括1		(5.5)	2.2	2.6				外面底に秋山酒店とあり	14図
徳利	E - 一括2		-	外･6.0、内･5.6	(14.2)			「不知火」登録商標	井筒屋・井上家	25図
深鉢	E - 一括3		15.0	6.7	7.0					14図
皿	E - 一括4		(19.0)	9.4	4.3			内面に「イチリキ正宗」あり	外面に青柳町一力萬屋醸造店	15図
灯明皿	E - 一括5		8.6	3.0	1.8			約 3/4 現存		25図
小皿	E - 一括6		8.4	2.4	1.6		乳白色	約 1/2 現存		25図

湯呑	E - 一括7	8.0	3.6	4.4			ほぼ完形	端反	14図
湯呑	E - 一括8	7.8	3.6	4.1			蛇の目高台、ほぼ完形		14図
湯呑	E - 一括9	6.4	3.4	5.0				外面底に文字あり	14図
湯呑	E - 一括 10	8.0	3.2	4.5					14図
湯呑	E - 一括 11	7.8	3.6	4.3		うぐいす色			14図
急須	E - 一括 12	6.0	6.2	6.0					25図
蓋	E - 一括 13	8.0	7.9	2.9		コバルトブルー	把手欠損、手描き		25図
蓋	E - 一括 14	7.0	6.9	2.4	1.4				25図
蓋	E - 一括 15	8.0	6.4	2.8	1.2			竹・梅の絵柄	25図
蓋	E - 一括 16	9.0	8.2	2.0	2.0			同心円文の絵柄	25図
小皿	E - 一括 17	7.1	2.5	2.0			約 3/4 現存		25図
薬ビン	E - 一括 18	2.3	5.7	14.6		透明	久保内科醫院		21図
薬ビン	E - 一括 19	1.4	3.3	7.9		透明	蘆澤醫院（旧字体の蘆澤）		21図
小ビン	E - 一括 20	1.4	1.7	6.6		透明	ひょうたん形		20図
小ビン	E - 一括 21	1.0	1.4	5.3		淡緑色	ペタンコでひょうたん形		20図
ビン	E - 一括 22	1.3	2.5	10.9	2.7	コバルトブルー	本舗山田安民、ロート目薬		20図
ビン	E - 一括 23	1.6	2.9	8.3		コバルトブルー	ＹＥＮの陽刻あり		20図
ビン	E - 一括 24	2.5	3.0	8.4	3.9	茶色半透明	丸ビン、底に陽刻あり		20図
ビン	E - 一括 25	1.6	3.6	10.9	4	緑色半透明	ヘチマコロン	化粧水ビン	20図
ビン	E - 一括 26	-	3.0	-		茶色半透明	MEAT JUICE	底にもマークあり	21図
ガラス蓋	E - 一括 27	12.8	11.5	7.3	3.5	透明	薬か、お菓子入れの蓋か		20図
ビン	E - 一括 28	2.1	6.9	28.8		茶色	AKADAMA PORT WINE	赤玉ポートワイン	21図
砥石	E - 一括 29	5.5	3.0	12.4				石製品	29図
瓦	E - 一括 30	25.9	-	-	4.6				26図
すり鉢	E - 一括 31	26.4	-	-	-				26図
すり鉢	E - 一括 32	ー	11.8	-	-				26図
仏花瓶	E - 一括 33	-	(11.5)	6.6	-			底には糸切り痕あり	25図
蓋のつまみ	E - 一括 34	-	-	4.6	7.0		火消し壺のつまみか	上面にひょうたん形の陰刻	25図
集緒器	E - 一括 35	2.0	-	0.6	-		中央に三番穴		25図
湯呑	E - 一括 36	7.7	3.8	4.0		青海波、花は白抜き	型紙か、完形	端反	17図
湯呑	E - 一括 37	7.7	4.0	4.0		紅葉、人物、帆掛け船、家の絵柄	銅板転写、完形	端反	17図
レンゲ	E - 一括 38	8.8	4.3	4.2	5.1	内面に図柄	型紙か	把手の一部欠損・鰍Ⅱ第２冊 P-197	17図
小瓶	E - 一括 39	2.0	3.2	13.3	4.5	松竹梅、上部はタコ唐草	銅板転写	口縁部欠損	17図
土瓶	E - 一括 40	8.0	8.6	8.4	(15.6)	花柄	完形	蓋を欠損	17図
蓋	E - 一括 41	10.3		3.1	3.9		型紙、口縁部内面に房	外面に文字あり	18図
中皿	E - 一括 42	20.1	9.1	3.5		花柄	型紙、蛇の目		18図
皿	E - 一括 43	(15.6)	(7.6)	4.2		日の丸と花柄	型紙、蛇の目		18図
皿	E - 一括 44	-	6.4	-		舟を漕ぐ人物か	青柳・秋山文字有り		18図
皿	E - 一括 45	(13.4)	7.1	3.5		花柄	型紙、蛇の目、1/2 現存		18図
皿	E - 一括 46	13.2	6.7	2.4		緑色	銅板転写、ほぼ完形		18図

皿	E - 一括 47	(14.9)	8.3	4.0		松竹梅、コバルトブルー	型紙、蛇の目		18図
皿	E - 一括 48	(14.2)	7.3	2.5		松竹梅、コバルトブルー	型紙	扇形・楕円区画内に絵柄	18図
皿	E - 一括 49	13.0	7.5	2.2		笹の絵柄	銅板転写、完形	見込みに文字あり	19図
皿	E - 一括 50	15.9	9.4	3.2			銅板転写、ほぼ完形		19図
茶碗	E - 一括 51	(11.5)	4.9	5			秋山酒造　正宗	宣伝用	19図
皿	E - 一括 52	12.8	7.2	2.2		五弁の花柄	銅板転写、区画内に人物		19図

表ー6

Fブロック	番　　号	A＝口径他	B＝底径他	C＝器高他	D＝幅 / 横他	色	形	備考	
湯呑	F - 一括 1	7.8	3.2	4.4		鳥と雲の絵柄か	蛇の目、1/2 現存	外面底に楕円形の陰刻あり	15図
茶碗	F - 一括 2	11.4	4.7	5.8			完形	端反	15図
すり鉢	F - 一括 3	-	-	10.8		鉄釉	1/4 現存、口縁部は三段	底部の中心は丸くへこむ	26図
インクビン	F - 一括 4	2.4	5.0	6.3		透明	丸形、丸善、底にMのマークあり		21図
ビン	F - 一括 5	2.0	2.8	6.8		透明	四角		21図
ビン	F - 一括 6	1.8	4.8	11.0		透明	楕円形、レートフード	化粧水瓶、底にマークあり	21図
小ビン	F - 一括 7	1.1	2.5	5.8		コバルトブルー	八角形、本舗山田安民	ロート目薬（昭和 42 に発売される）	21図
蓋	F - 一括 8	12.6	-	3.1	16.0		1/3 現存	鍋の蓋	26図
蓋	F - 一括 9	9.8	-	3.0	4.0		ほぼ完形		15図
茶碗	F - 一括 10	11.2	4.4	6.1		鳥の絵柄	銅板転写		15図
ビン	F - 一括 11	1.4	3.5	8.0	4.0	透明	蘆澤醫院	蘆澤醫は旧字体	21図
湯呑	F - 一括 12	7.8	3.8	4.8		梅の絵柄	1/2 現存	底部に「松泉」の文字あり	15図
灯明皿	F - 一括 13	9.6	4.2	2.2		灰色	ほぼ完形		26図
小ビン	F - 一括 14-1	1.8	3.0	2.7		透明	円形、口は端にある	14-2 と形状が同じ	22図
小ビン	F - 一括 14-2	1.8	3.0	1.8		透明	円形、口は端にある	14-1 と形状が同じ	22図
小ビン	F - 一括 14-3	1.5	2.6	2.8		透明	円形、口は中央にある	胴部が角張る	22図
小ビン	F - 一括 14-4	1.7	2.0	3.2		透明	円形、口は中央にある	胴部は円形	22図
鉢	F - 一括 15	34.0/37.4	(17.0)	(25.0)	(18.0)	緑の釉	捏ね鉢		27図
ビン	F - 一括 16	1.4	2.3	7.1		透明	丸形、外用コリサ	薬瓶	21図
ビン	F - 一括 17	1.0	2.0	8.2		緑色半透明	六角形、薬液ハルナー	薬瓶	22図
ビン	F - 一括 18	2.1	4.8	11.0		透明	楕円形、芦澤醫院	澤と醫は旧字体	22図
ビン	F - 一括 19	1.8	2.5	6.6		コバルトブルー	四角、ワカヤナギ	薬瓶	22図
湯呑	F - 一括 20	8.0	3.0	4.2		手描き、見込みは吹き付け	蛇の目	2/3 現存	15図
小ビン	F - 一括 21	0.9	2.6	6.0		透明	丸形、目盛りあり		22図
小ビン	F - 一括 22	1.5	2.4	6.8		コバルトブルー	楕円形、東京玉置専賣	岡田コロダイン、頭痛、腹痛薬か	22図
ビン	F - 一括 23	2.3	6.0	19.6	6.6	茶色半透明	八角形、BLUTOS	底に2　0あり	22図
ビン	F - 一括 24	1.4	2.8	12.7		緑色半透明	八角形、首の長い瓶、		22図
ビン	F - 一括 25	2.2	5.8	13.4	6.4	透明	楕円形、横手醫院		22図
ビン	F - 一括 26	2.5	4.0	7.7		コバルトブルー	丸形、底にTF	薬瓶	22図
ビン	F - 一括 27	2.2	3.4	8.0		茶色半透明	丸形、底にP	大日本製薬か	22図
ビン	F - 一括 28	2.1	2.9	6.9		透明	ウラシマ印　拓本	底に八あり	22図
ビン	F - 一括 29	3.3	5.6	16.5		緑色半透明	円形	完形	22図

ガラス栓	F - 一括 30	6.6	4.0	4.5		茶色半透明	円筒形		２２図
ガラス栓	F - 一括 31	7.8	4.8	5.2		半透明	円筒形		２２図
小鉢	F - 一括 32	10.5	5.6	5.9		茶緑色		口縁部一部欠損	２６図
蓋	F - 一括 33	10.8	-	(2.6)	14.0				２６図
蓋	F - 一括 34	18.0	-	4.7	18.2	つまみ部は 6.6	つまみ部に針金が巻かれている		２６図
ビン	F - 一括 35	2.6	4.1	4.8	4.3	透明	四角、底にサムライ		２２図
栓	F - 一括 36-1	0.9	-	2.0	2.5	乳白色		機械栓	２６図
栓	F - 一括 36-2	1.0	-	3.2	2.6	乳白色		機械栓	２６図
ビン	F - 一括 37	1.5	-	6.5	4.4	透明	平たい		２２図
栓	F - 一括 38	5.0	2.6	6.1		茶色半透明	円形、中空洞	形状から栓としたが、粉あり	２２図
蓋	F - 一括 39	5.8	4.4	1.7		緑色	円形		２２図
ビン	F - 一括 40	1.8	3.8	9.1	4.0	透明	四角、玉置薬局謹製	外用ヨージ水	２３図
ビン	F - 一括 41	2.6	4.4	7.8	4.6	緑色半透明	丸形、底にT.　F.		２２図
ビン	F - 一括 42	2.0	4.0	9.3	4.8	茶色半透明	四角		２２図
ビン	F - 一括 43	2.0	3.6	12.5	4.3	透明	BLANC DE LAIT　四角	化粧水瓶、明治 39 年発売	２２図
ビン	F - 一括 44	2.1	5.6	23.7	6.4	緑色半透明	別府鑛泉株式會社、登録商標	王冠栓　サイダー瓶	２２図
ビン	F - 一括 45	1.8	3.2	7.9	3.9	茶色半透明	四角、底にY		２２図
ビン	F - 一括 46	2.4	4.6	12.1		透明	八角形	底に平尾	２３図
ビン	F - 一括 47	1.7	3.2	8.8		茶色半透明	八角形、BLUTOSE	底にT.　Fあり	２２図
小皿	F - 一括 48	(11.6)	4.0	2.2				1/3 現存	２７図
小皿	F - 一括 49	8.6	3.0	2.0				1/2 現存	２６図
灯明皿	F - 一括 50	11.6	4.2	2.2				ほぼ 1/1 現存	２７図
灯明皿	F - 一括 51	8.4	4.0	2.0				完形	２７図
スズリ	F - 一括 52	4.3	7.8	1.0			小型の完形	使用頻度が少ない	２６図
湯呑	F - 一括 53	8	3.5	4.2		うぐいす色		完形	１５図
皿	F - 一括 54	(13.6)	9.0	4.2				手描き	１５図
碍子	F - 一括 55	2.2	3.0	5.0				完形	２６図
茶碗	F - 一括 56	11.1	4.1	5.3		桐の絵柄	型紙・口縁部２／３現存		１９図
深鉢	F - 一括 57	14.5	6.4	6.2		コバルトブルー	口縁部約 1/ ２現存		１９図
皿	F - 一括 58	(17.2)	(9.5)	2.6			型紙・1/2 現存・底部は蛇の目		１９図
皿	F - 一括 59	(15.1)	(8.4)	4.2		日の丸の絵柄	型紙・蛇の目・口縁部 1/4 現存		１９図
徳利	F - 一括 60	-	5.5	-	6.1	鳥の絵柄	底部に文字	口縁部欠損	１９図

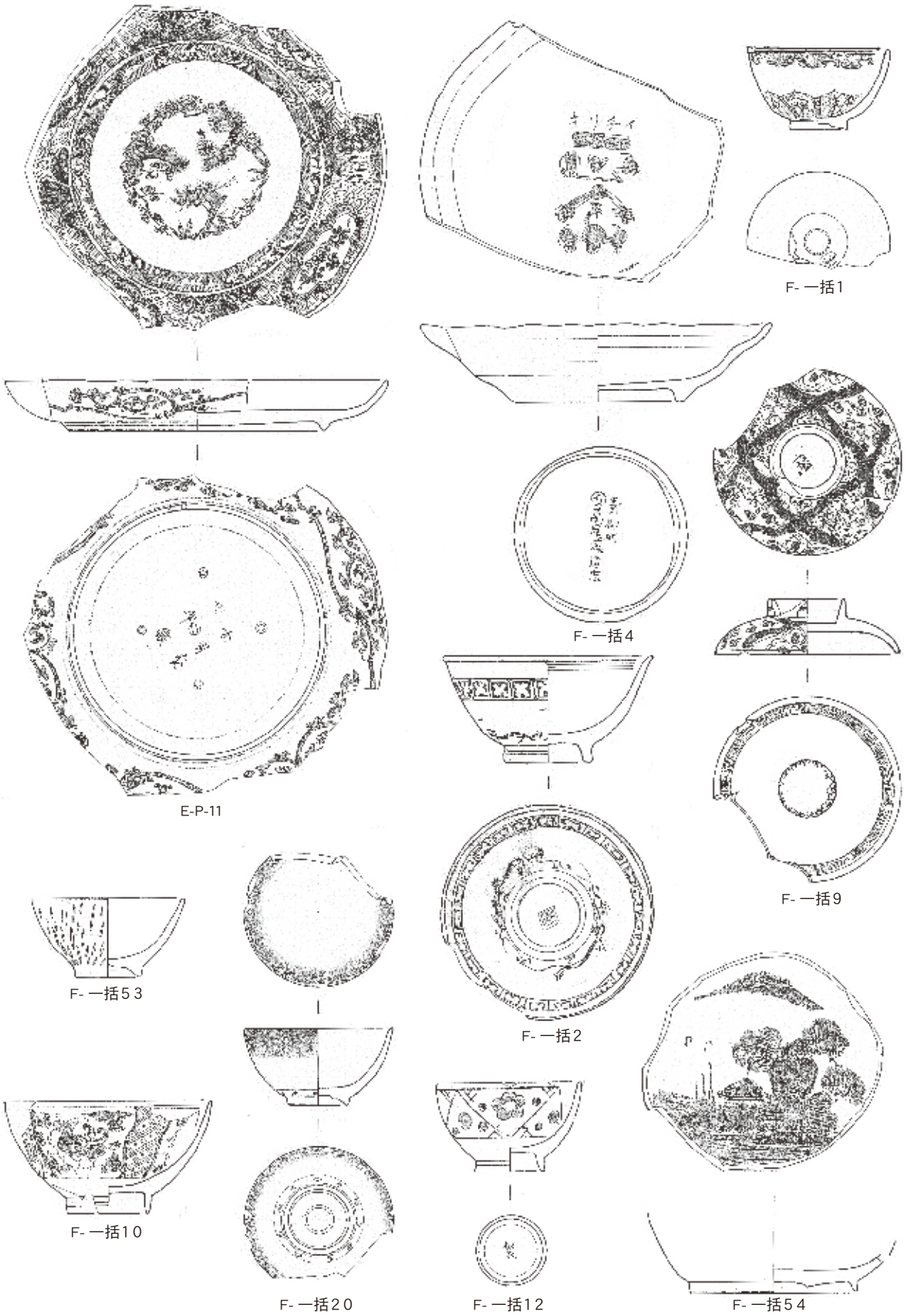
表ー７

グリッド	番　　号	A＝口径他	B＝底径他	C＝器高他	D＝幅 / 横他	色	形	備考	
皿	D-8G-P-1	(13.5)	7.2	2.7		こんにゃく印五弁花	江戸時代	道の第３～２面出土	１６図
石盤	D-9G-K-2	15.0	22.3	0.5			紐をかけたような穴あり	ほぼ完形	２８図
ビールビン	D-5G-G-1	(3.2)	7.0	28.8		茶色半透明	NIPPON BEER KOSEN CO.LTD	王冠栓	２３図
石臼	D-5G-P-1	-	-	-					２７図
碍子	D-6G	(7.2)		1.4	1.9	土堤上層	天井に付けるもの		２７図
蓋	D-9G-P-3	6.0	4.3	1.9	1.1				２７図
茶碗	D-9G-P-8	(10.2)	4.0	5.0		鉄釉	内面に松葉の絵	端反	１６図

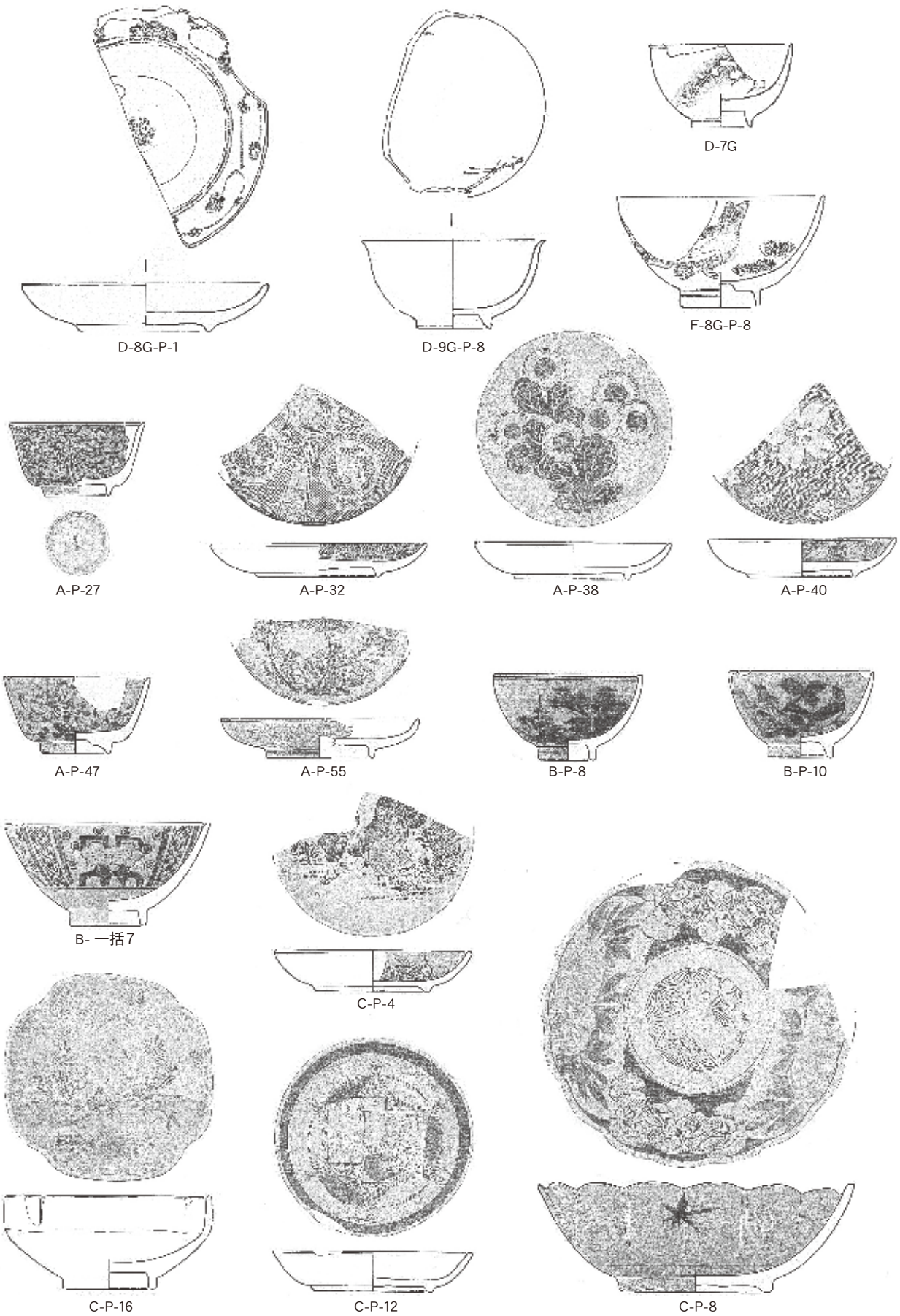
湯呑	D-7G	(7.8)	(3.2)	4.6		外面吹き付け			１６図
鍋の蓋	D-7G	12.3	-	4.1				1/3 現存	２７図
瓦	D-8G ﾄﾚﾝﾁ	(13.4)	(13.0)	1.5			平瓦	土堤状の高まり第３面出土	２８図
瓦	D-9G-K-1	(16.3)	25.5	1.5			平瓦		２８図
碍子	D-6G	(7.2)	-	1.4	1.9				２７図
ビン	E-5G 一括 -1	1.8	3.6	6.0	2.2	茶色	丸形		２３図
ビン	E-5G 一括 -2	2.2	3.6	6.1	2.4	茶色	丸形	ゴム栓	２３図
砥石	E-7G	2.5	7.3	1.2					２９図
ビン	E-8G	1.5	2.8	6.0		コバルトブルー	楕円形	薬瓶	２３図
ビン	E-9G-G-1	(2.4)	3.4	14.3		透明	丸形、牛乳瓶５勺入	機械栓	２３図
蓋	E-9G-P-8	5.8	5.6	1.3	1.6			裏に秋山のマークあり	２７図
ビン	E-9G-P-9	2.2	4.6	14.7	5.3	透明	丸形	底にマークあり	２３図
徳利	E-9G-P-11	4.2	8.0	26.2				底部一部欠損	２７図
植木鉢	E-9G-P-12	21.4	17.4	20.0					２８図
砥石	F-7G 一括	3.0	5.7	3.0					２９図
茶碗	F-8G-P-8	11.4	4.4	8.2		鯉の絵柄	口縁部 3/4 現存・蛇の目		１６図
すり鉢	G-13G-P-1	-	-	-				石垣周辺	２７図
すり鉢	G-13G-P-6	-	-	-				石垣周辺	２７図
甕の底	H-13G-P-12	-	(15.0)	(4.8)		H-13G-P-2 と接合		石垣周辺	２８図
小型の甕	H-13G-P-3	14.6	-	-		口縁部のみ	石列５区と接合		２７図
寛永通宝	G-8G-C-1								２９図
寛永通宝	F-5G-C-1								２９図
寛永通宝	F-5G-C-2								２９図
寛永通宝	F-5G-C-3								２９図
明治一銭	E-6G-C-1								２９図

A-P-6
A-P-33
A-P-28
A-P-36
A-P-3
A-P-36
A-P-45
A-P-49
A-P-9
A-P-21
A-P-46
C-P-5
C-P-9
C-P-15
C- 一括8
E-P-3
E- 一括3
E- 一括9
E- 一括1
E- 一括7
E- 一括8
E- 一括10

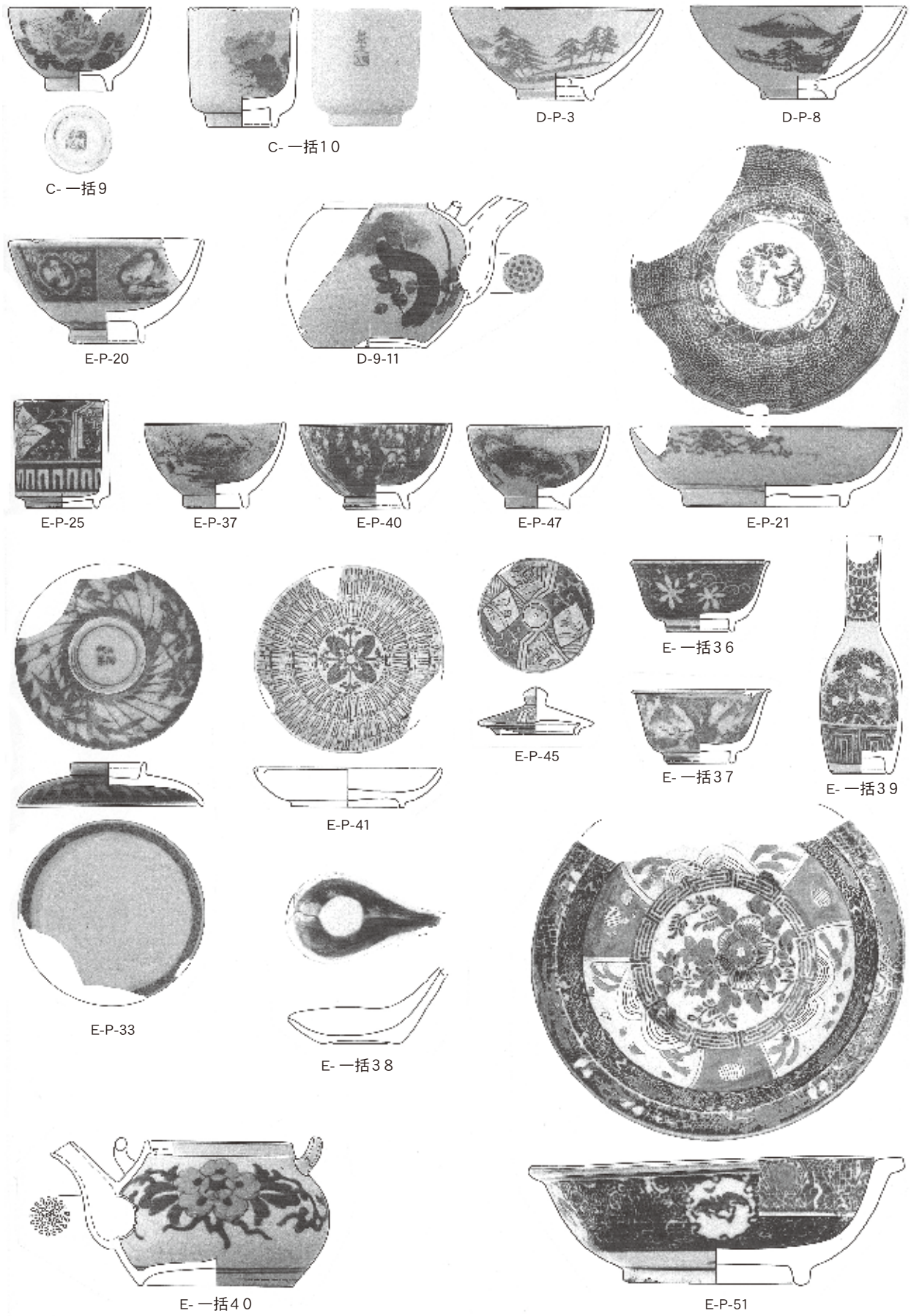
第14図　磁器（1）（1/3）



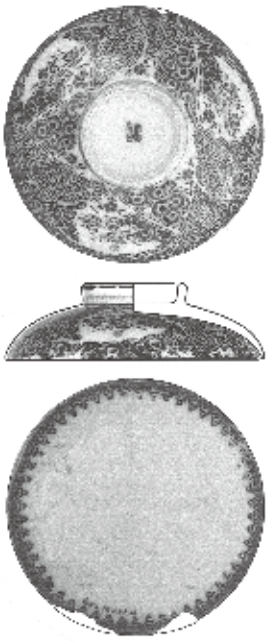
第15図　磁器（2）（1/3）


D-7G
D-8G-P-1
D-9G-P-8
F-8G-P-8
A-P-27
A-P-32
A-P-38
A-P-40
A-P-47
A-P-55
B-P-8
B-P-10
B- 一括7
C-P-4
C-P-16
C-P-12
C-P-8

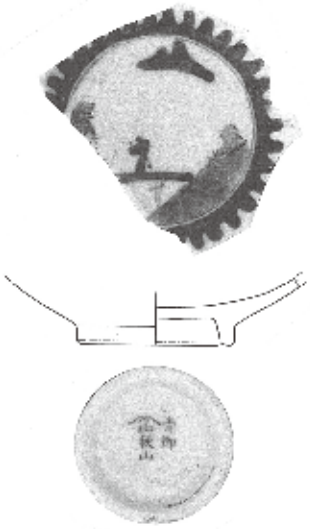
第16図　磁器（3）（1/3）


C- 一括10
C- 一括9
D-P-3
D-P-8
E-P-20
D-9-11
E-P-25
E-P-37
E-P-40
E-P-47
E-P-21
E- 一括36
E-P-45
E- 一括37
E- 一括39
E-P-41
E-P-33
E- 一括38
E- 一括40
E-P-51

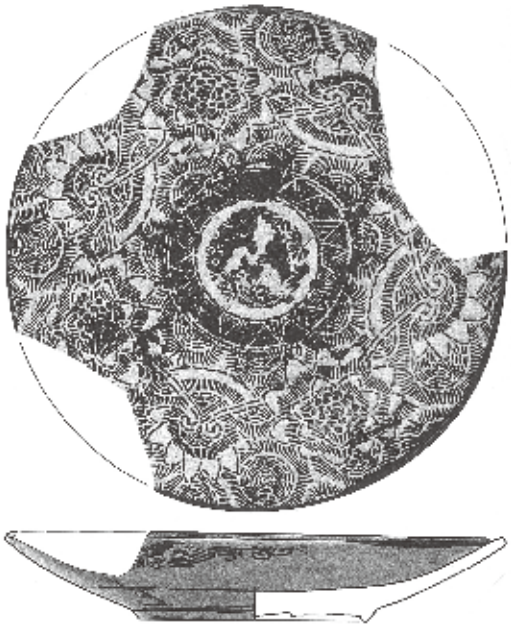
第17図　磁器（4）（1/3）

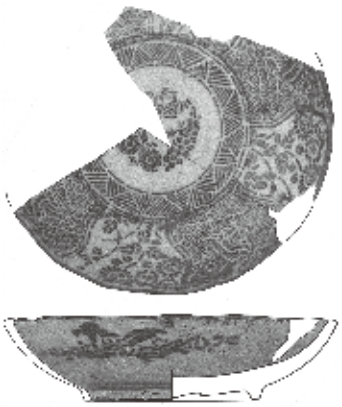


E- 一括41

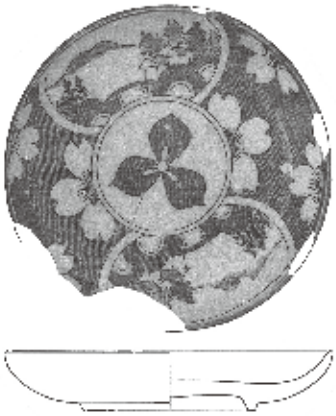


E- 一括44

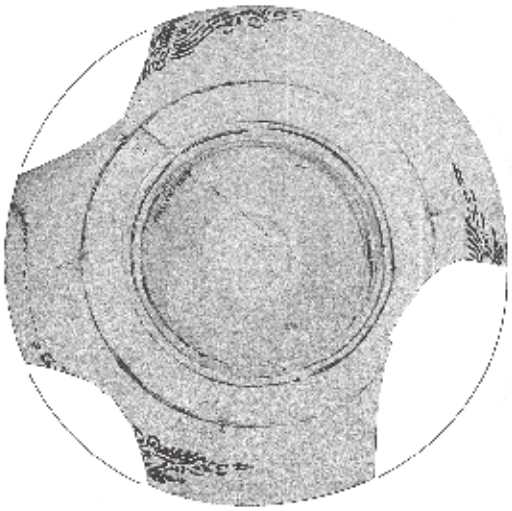




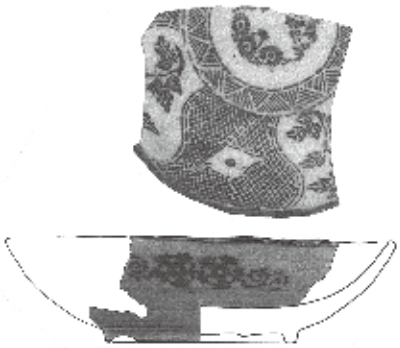
E- 一括45



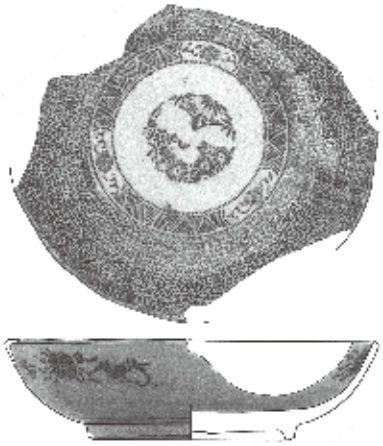
E- 一括46



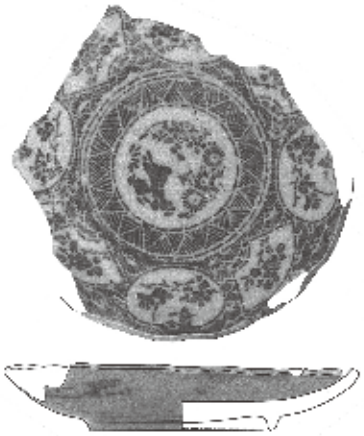
E- 一括42



E- 一括43



E- 一括47

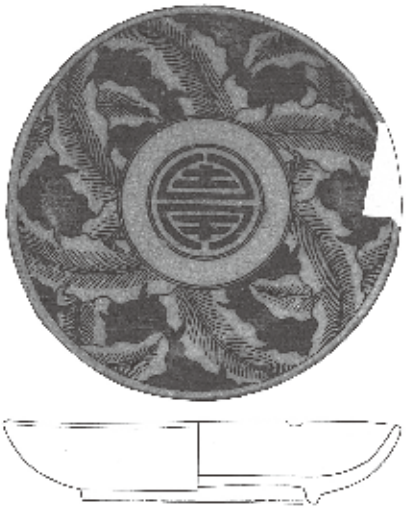


E- 一括48

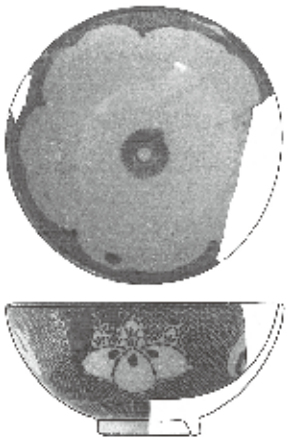
第18図　磁器（5）（1/3）

E- 一括49

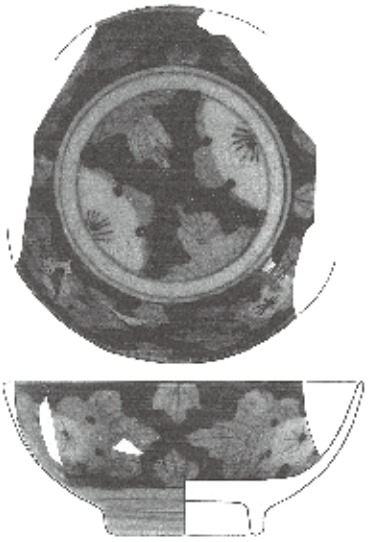
E- 一括52



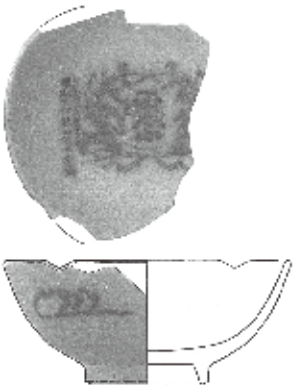
E- 一括50



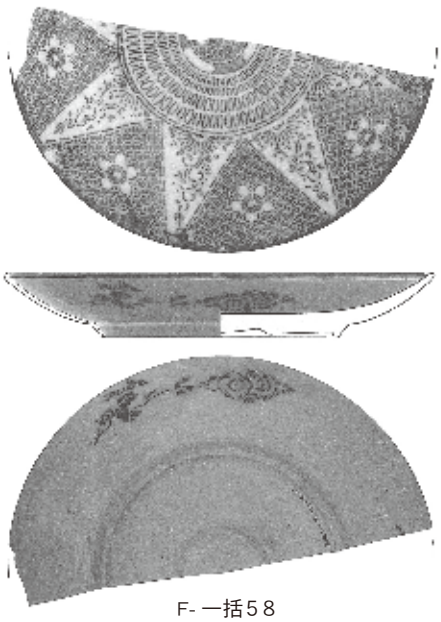
F- 一括56



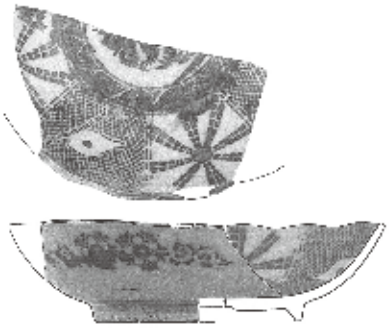
F- 一括57



E- 一括51



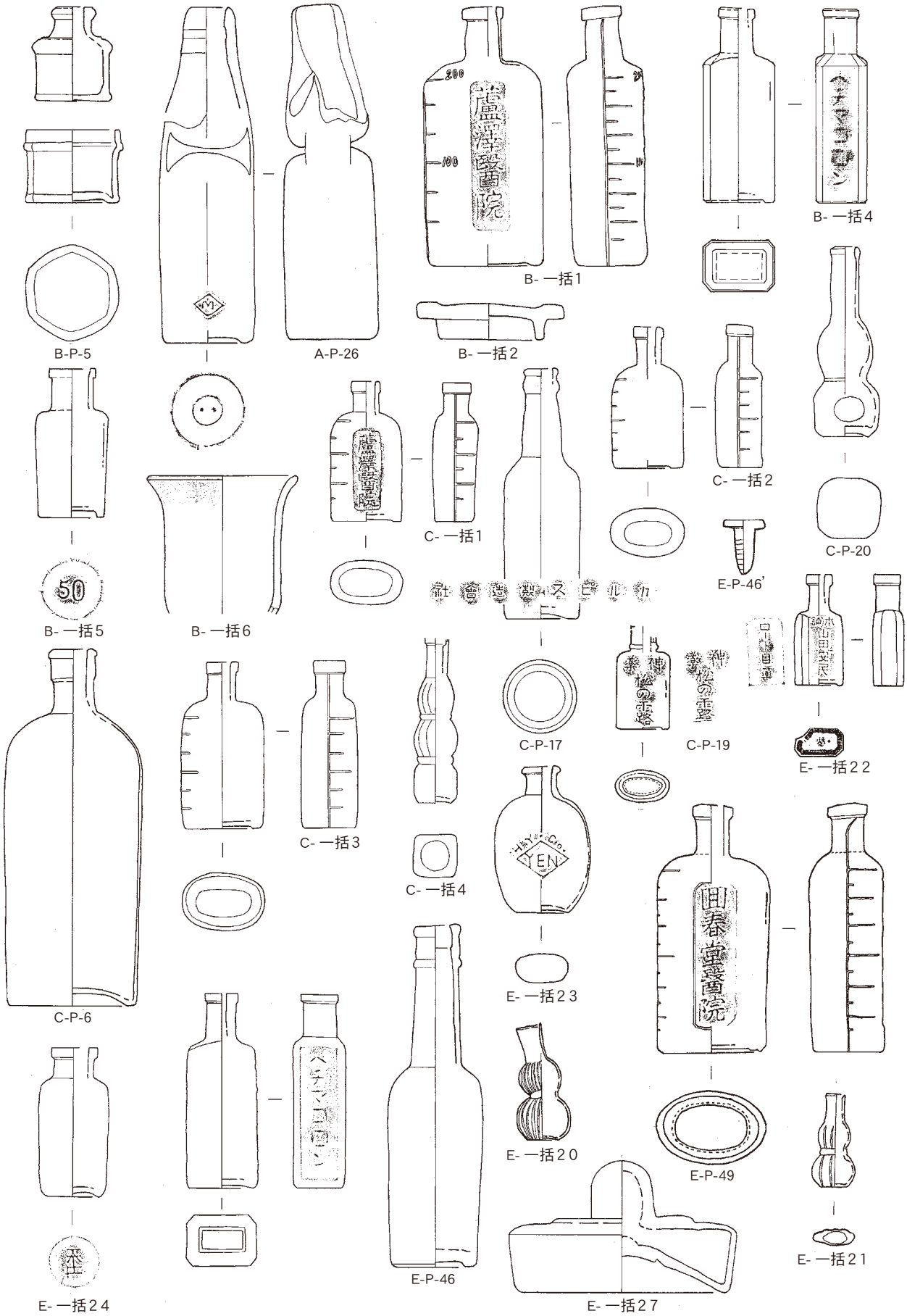
F- 一括58



F- 一括59

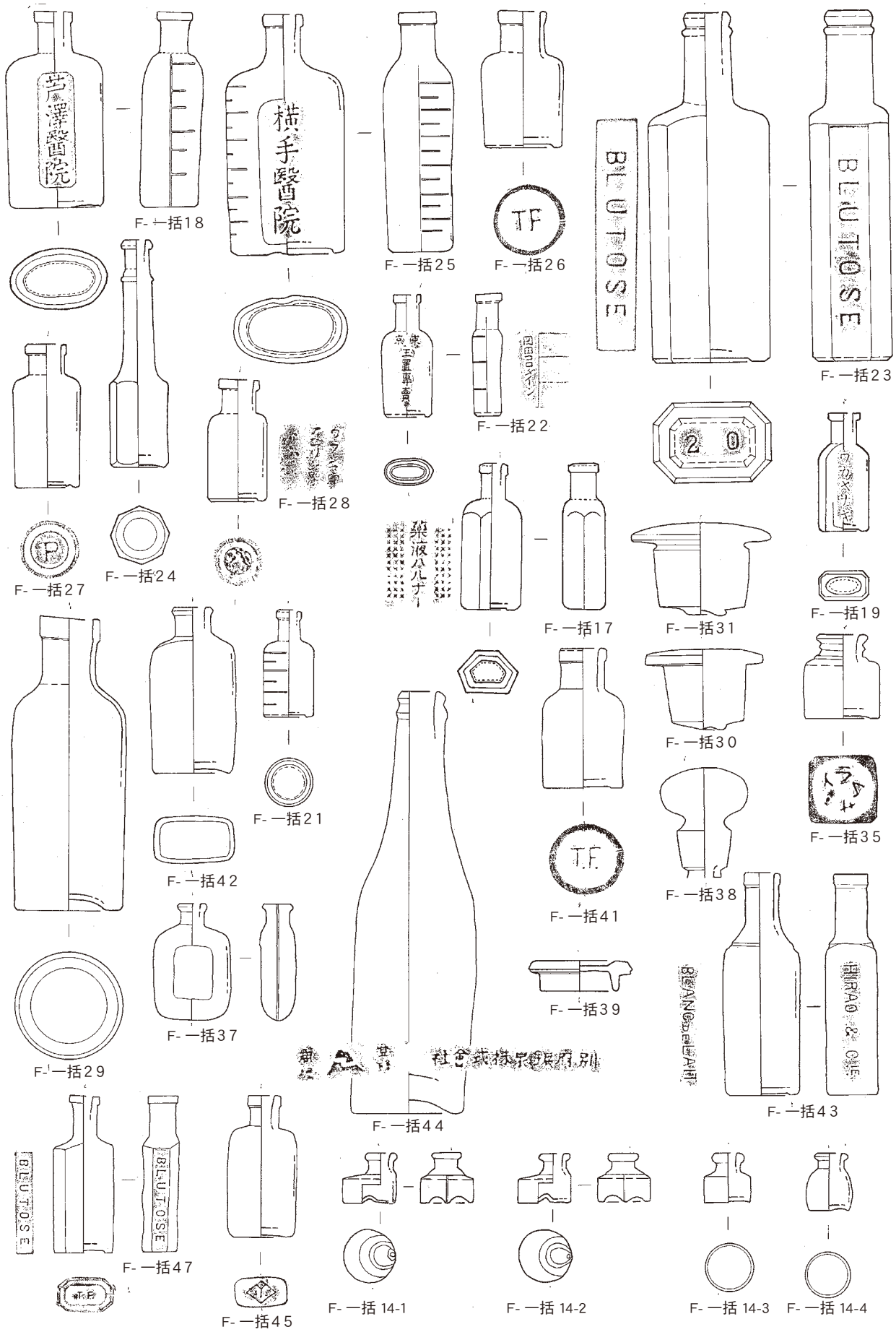
F- 一括60

第19図　磁器（6）（1/3）

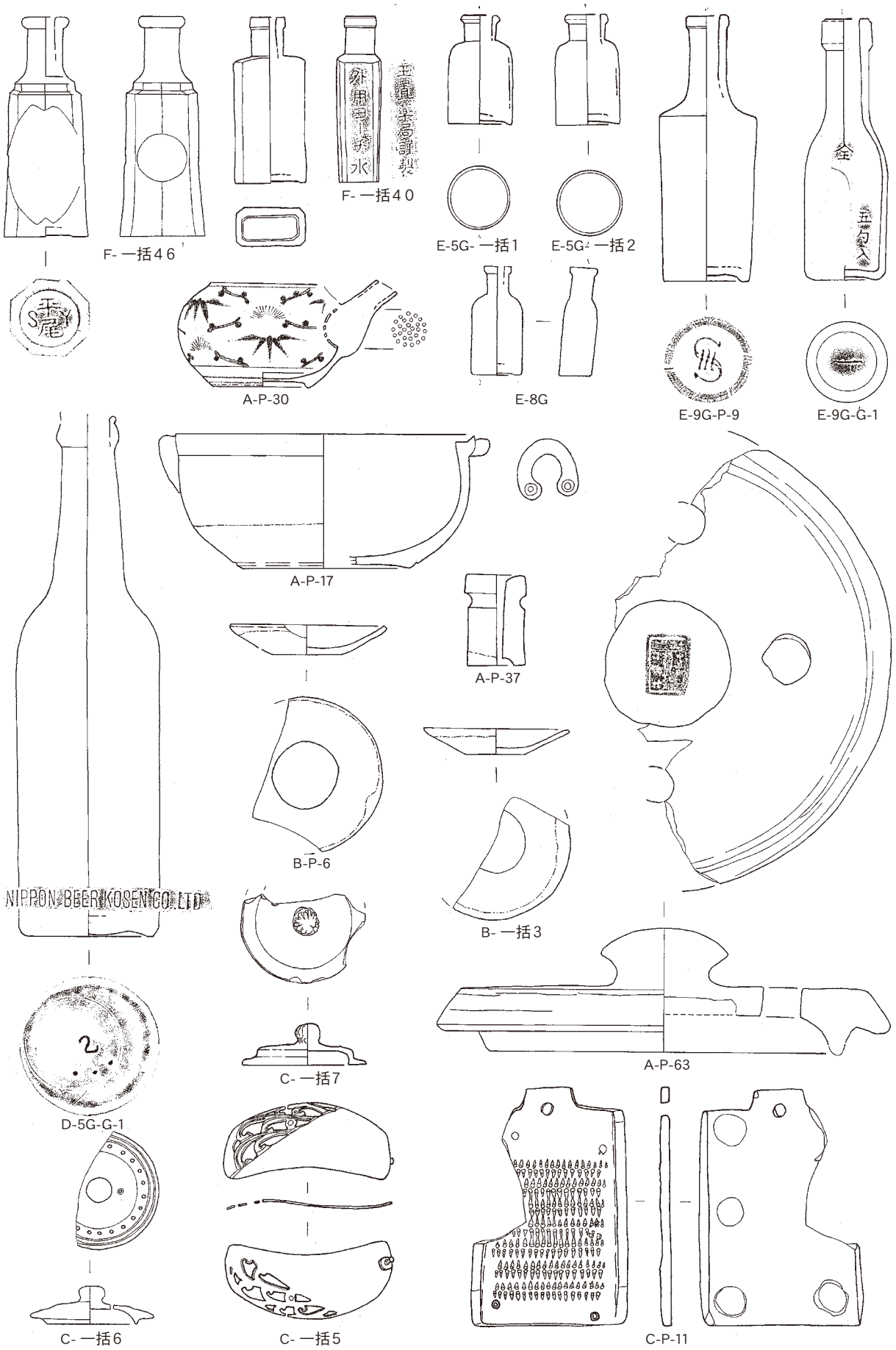


第20図　ガラス製品（1）（1/3）

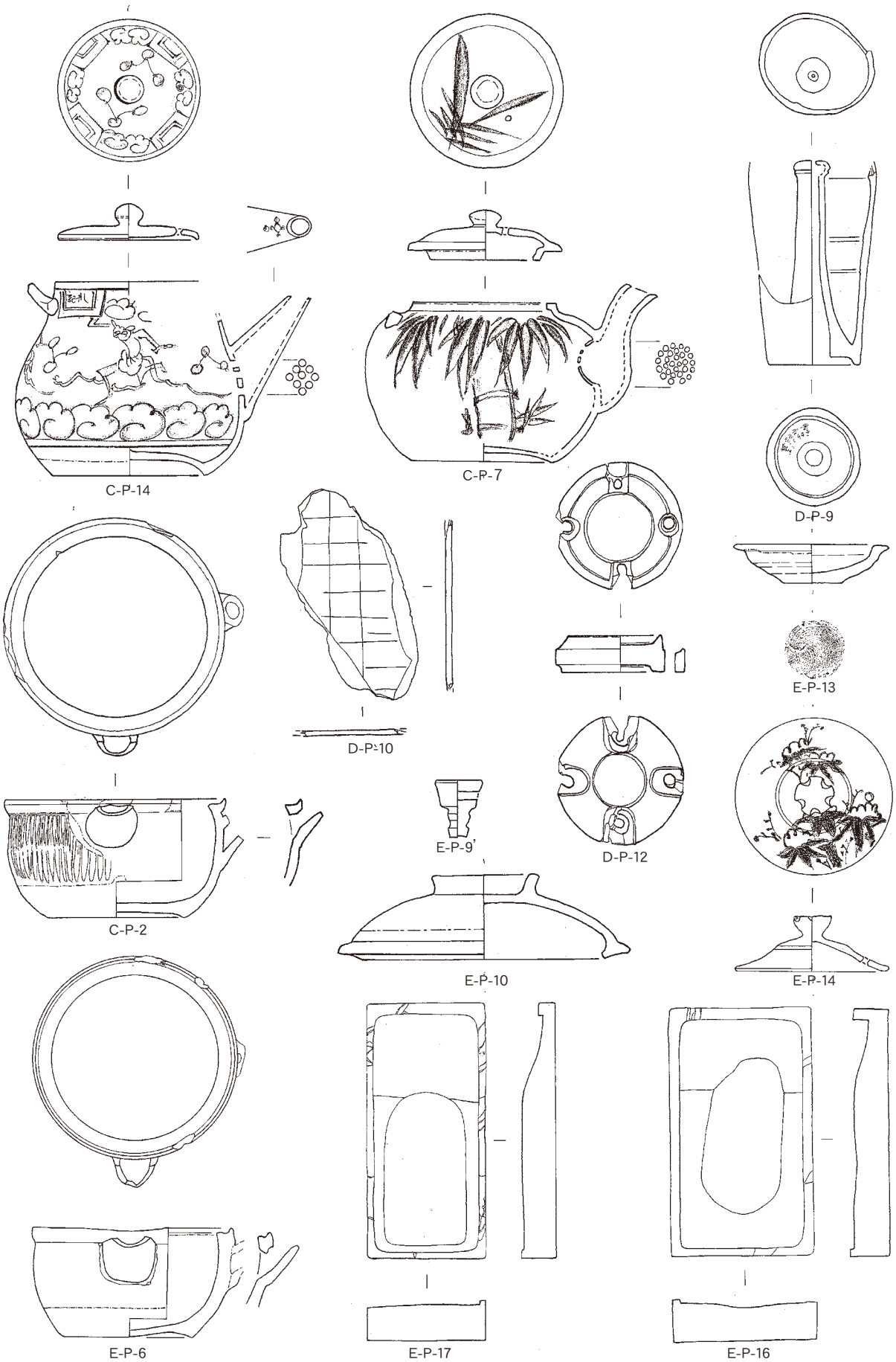
第21図　ガラス製品（2）（1/3）



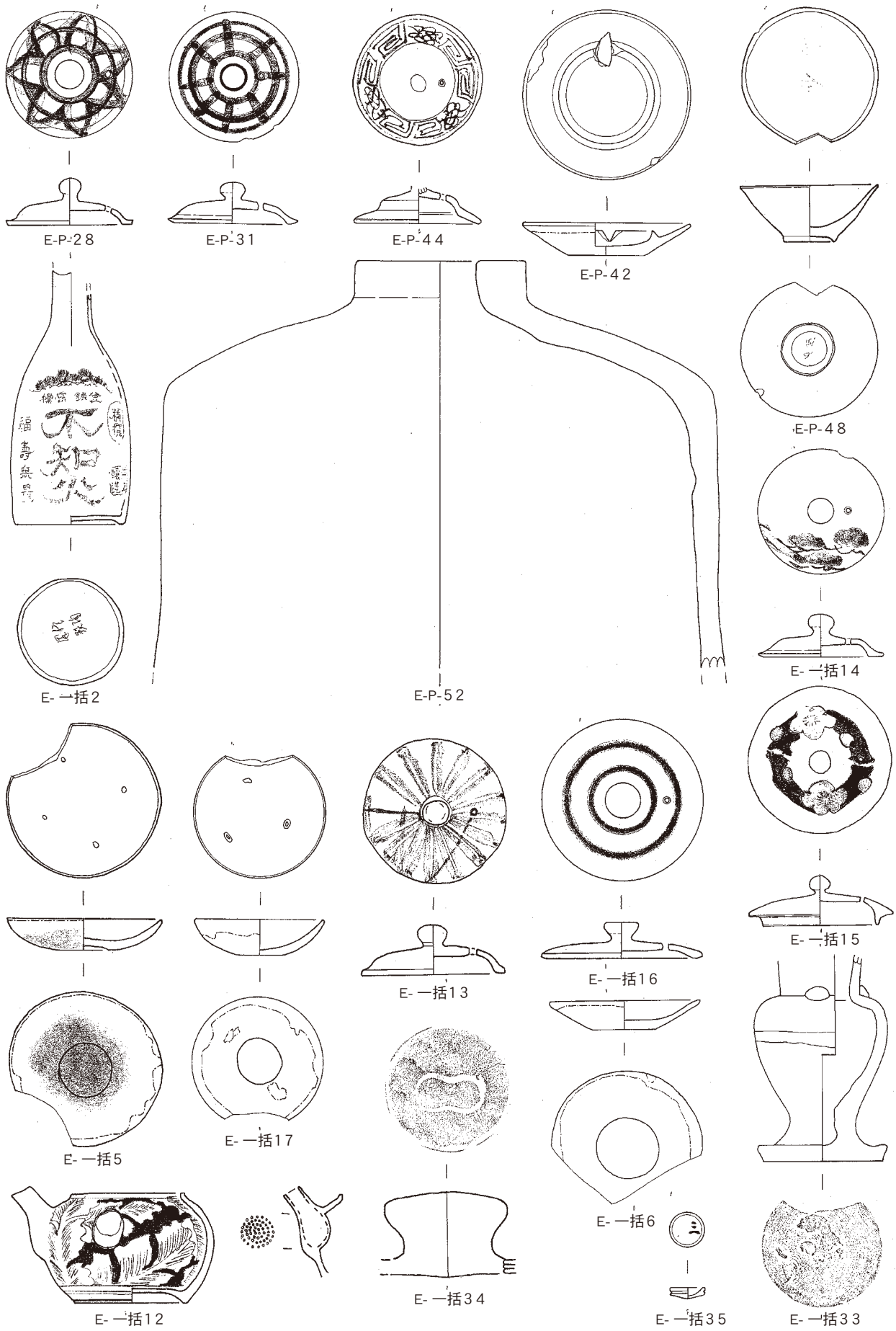
第22図　ガラス製品（3）（1/3）



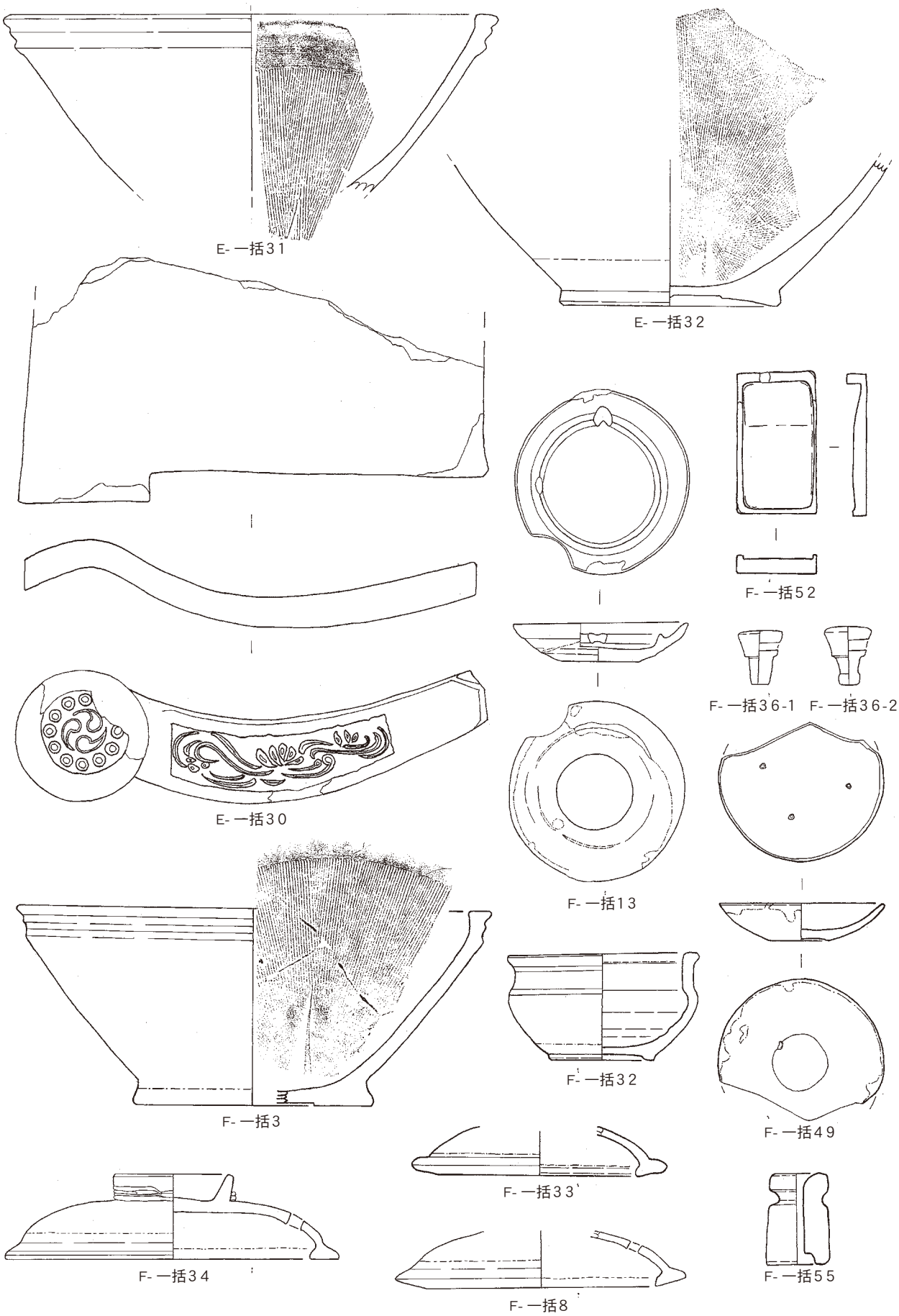
第23図　ガラス製品（4）・陶磁器（1）（1/3）



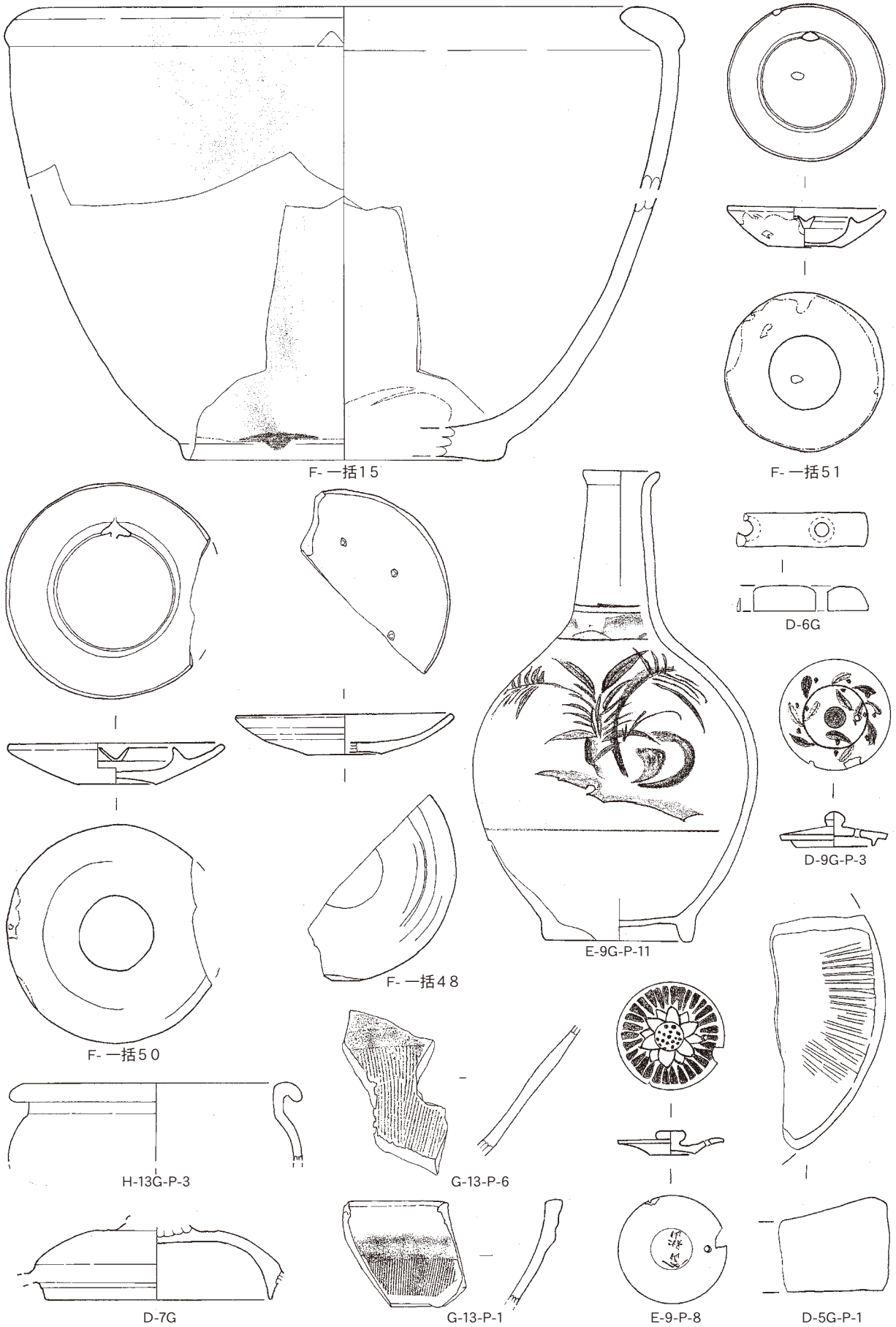
第24図　陶磁器（2）・石製品（1/3）


E-P-28
E-P-31
E-P-44
E-P-42
E-P-48
E-P-52
E-一括2
E-一括14
E-一括15
E-一括16
E-一括13
E-一括5
E-一括17
E-一括6
E-一括12
E-一括34
E-一括35
E-一括33

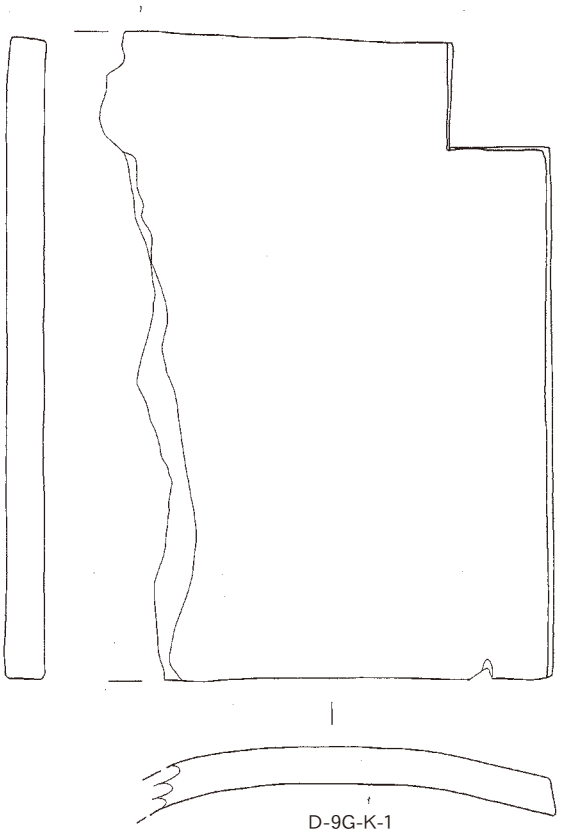
第25図　陶磁器（3）（1/3）

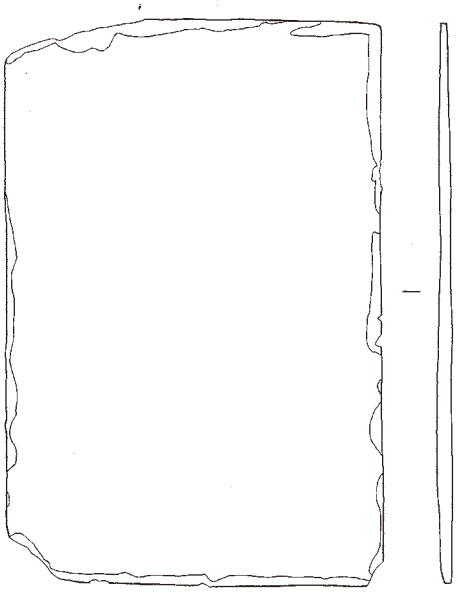


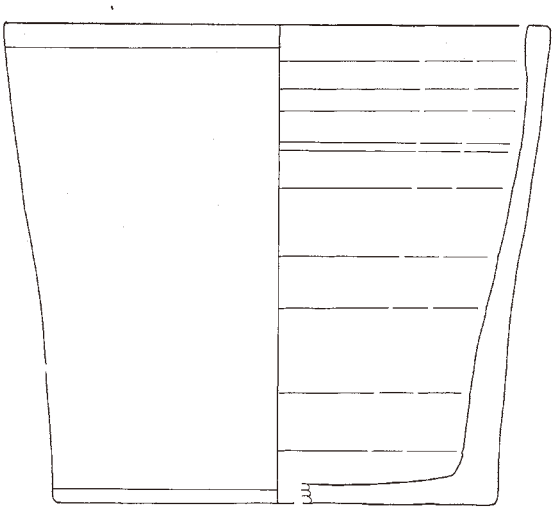
第26図　陶磁器（4）・瓦・硯（1/3）

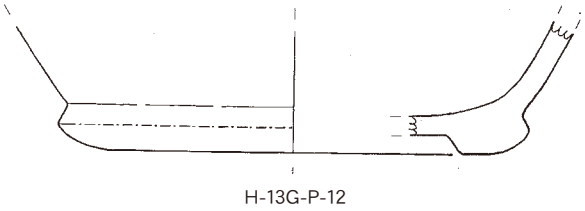

F-一括15
F-一括51
D-6G
D-9G-P-3
E-9G-P-11
F-一括48
F-一括50
H-13G-P-3
G-13-P-6
D-7G
G-13-P-1
E-9-P-8
D-5G-P-1

第27図　陶磁器（5）（1/3）

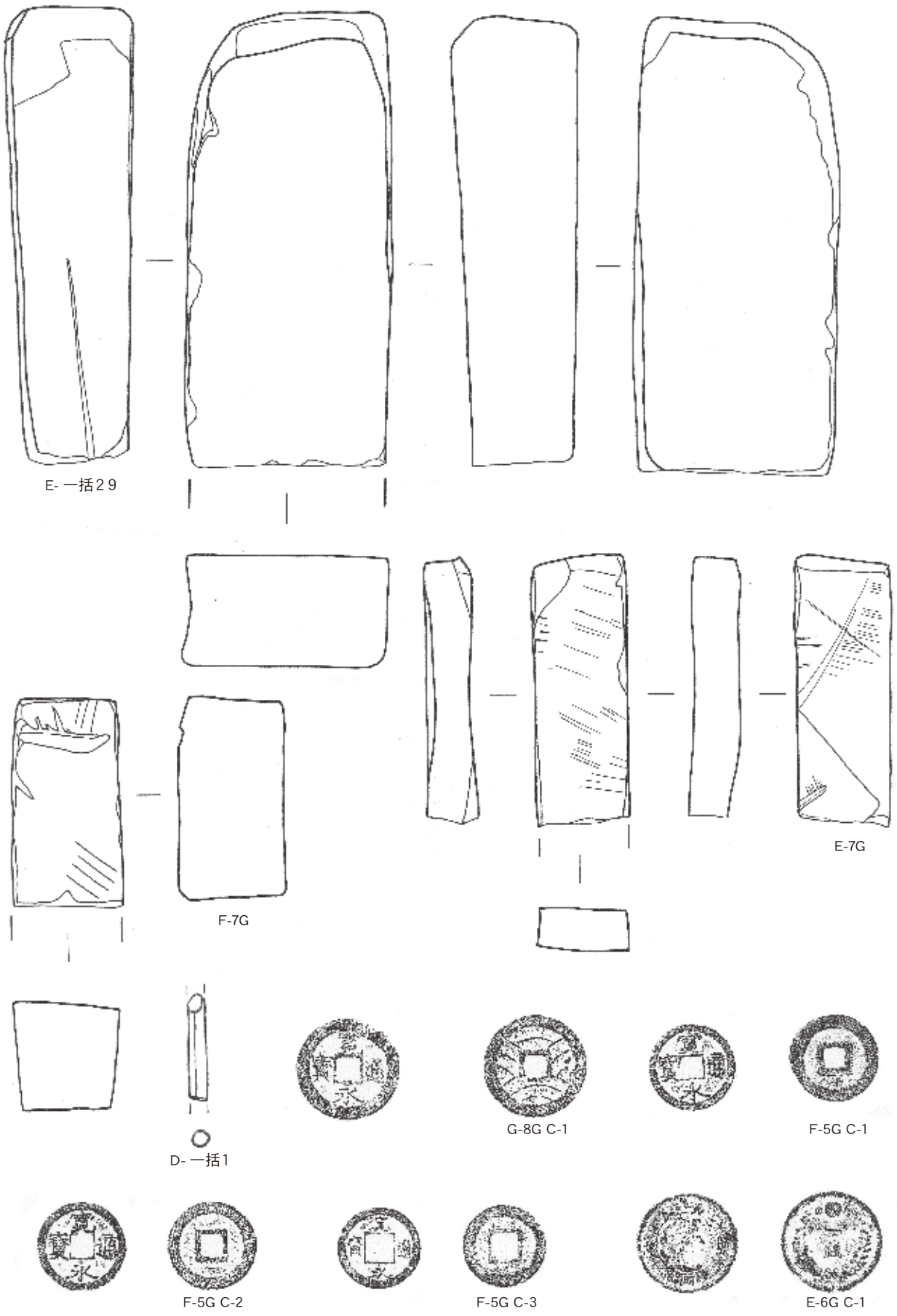








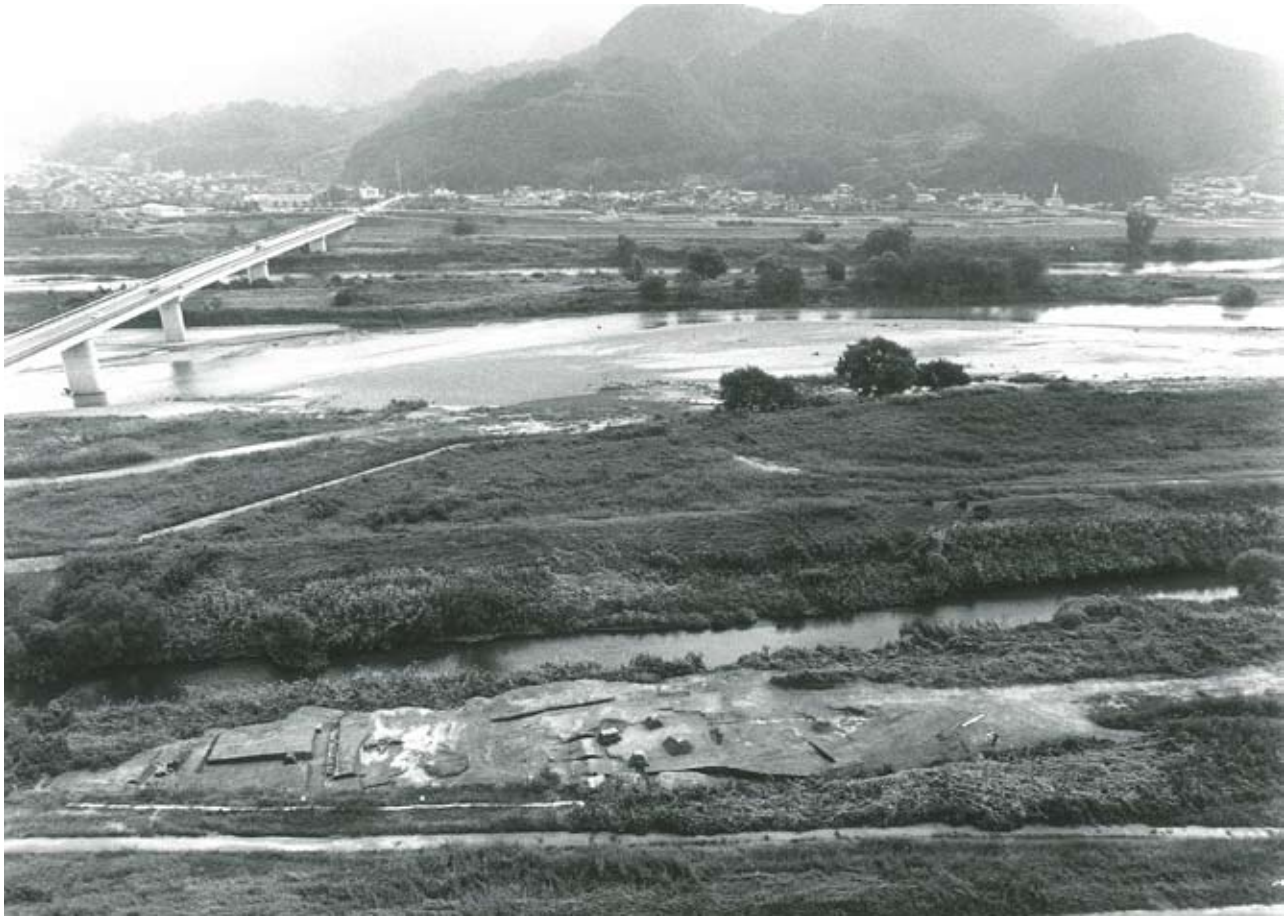
第28図　陶磁器（6）・瓦・石板・植木鉢（1/3）



第２９図　砥石・石筆および古銭（2/3）

図　　版

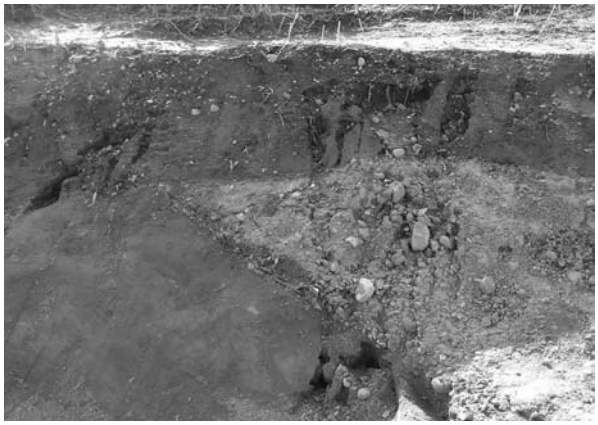
図版1



図版2

富士川大橋から調査区を撮影

土堤状の高まりと礫の状況



土堤状の高まりと礫の状況

埋め立て状況（斜めに混入している）

石垣検出状況

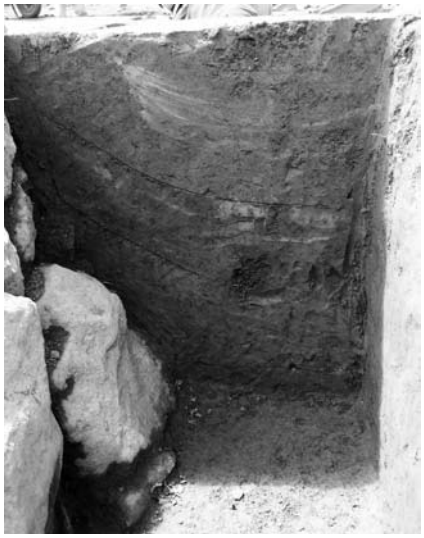
発掘調査区の状況

石垣の調査状況

石垣の調査状況

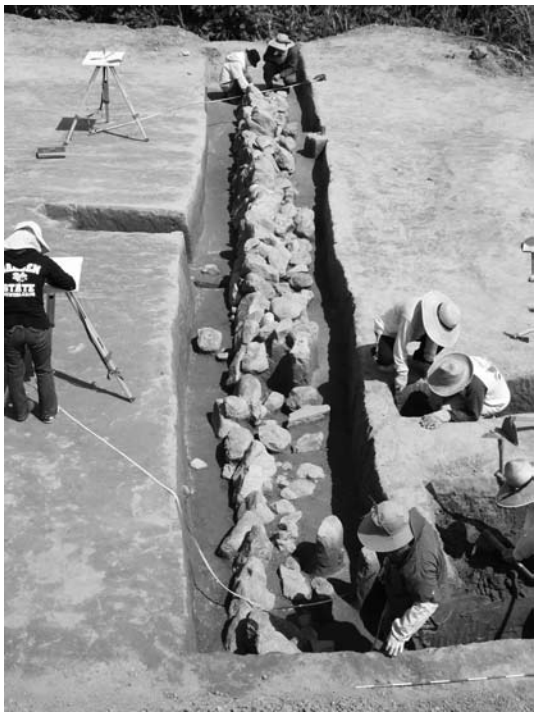
石垣の調査状況

石垣の調査状況



石垣北面の土層堆積状況

石垣北側の調査状況



石垣の調査状況

石垣の調査状況

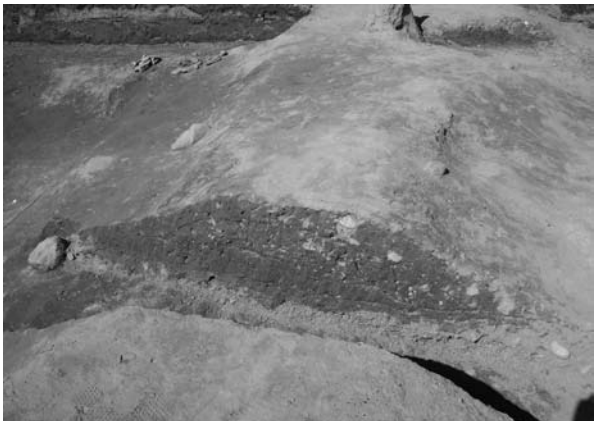
石垣の調査状況

図版4

土堤状の高まりの調査状況

土堤状の高まりの調査状況

土堤状の高まりの調査状況



土堤状の高まりの断面

Aブロック出土状況

Bブロック出土状況

Cブロック出土状況

Dブロック出土状況

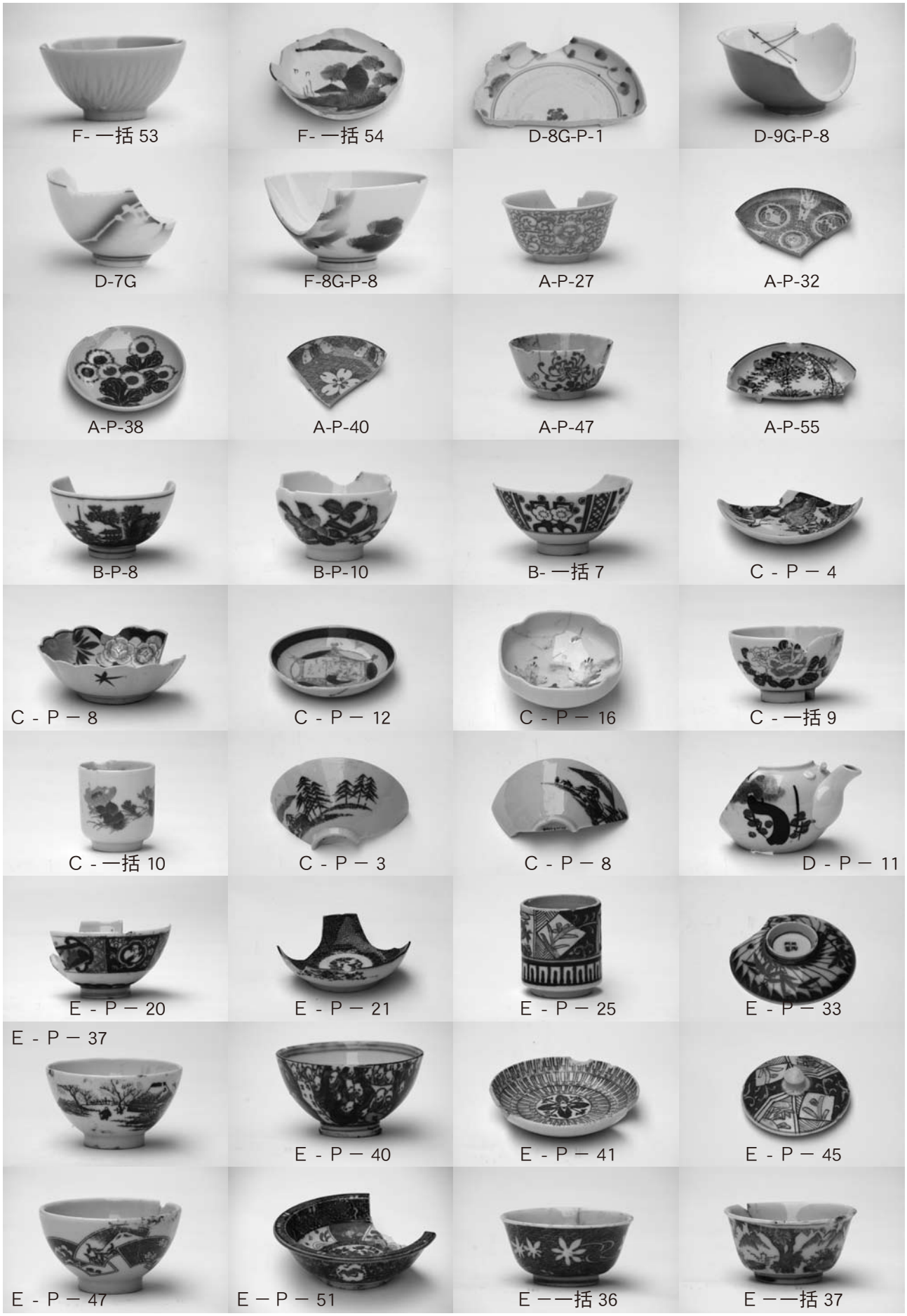
Eブロック出土状況

乾電池

図版5

A-P-3
A-P-6
A-P-9
A-P-21
A-P-28
A-P-33
A-P-36
A-P-46
A-P-45
A-P-45
A-P-49
A-P-52
C-P-5
C-P-9
C-P-15
C- 一括 8
E-P-3
E- 一括 1
E- 一括 3
E- 一括 7
E- 一括 8
E- 一括 9
E- 一括 10
E- 一括 11
E-P-11
E-P-11
E- 一括 4
E- 一括 4
F- 一括 1
F- 一括 2
F- 一括 2
F- 一括 10
F- 一括 9
F- 一括 9
F- 一括 12
F- 一括 20

図版6

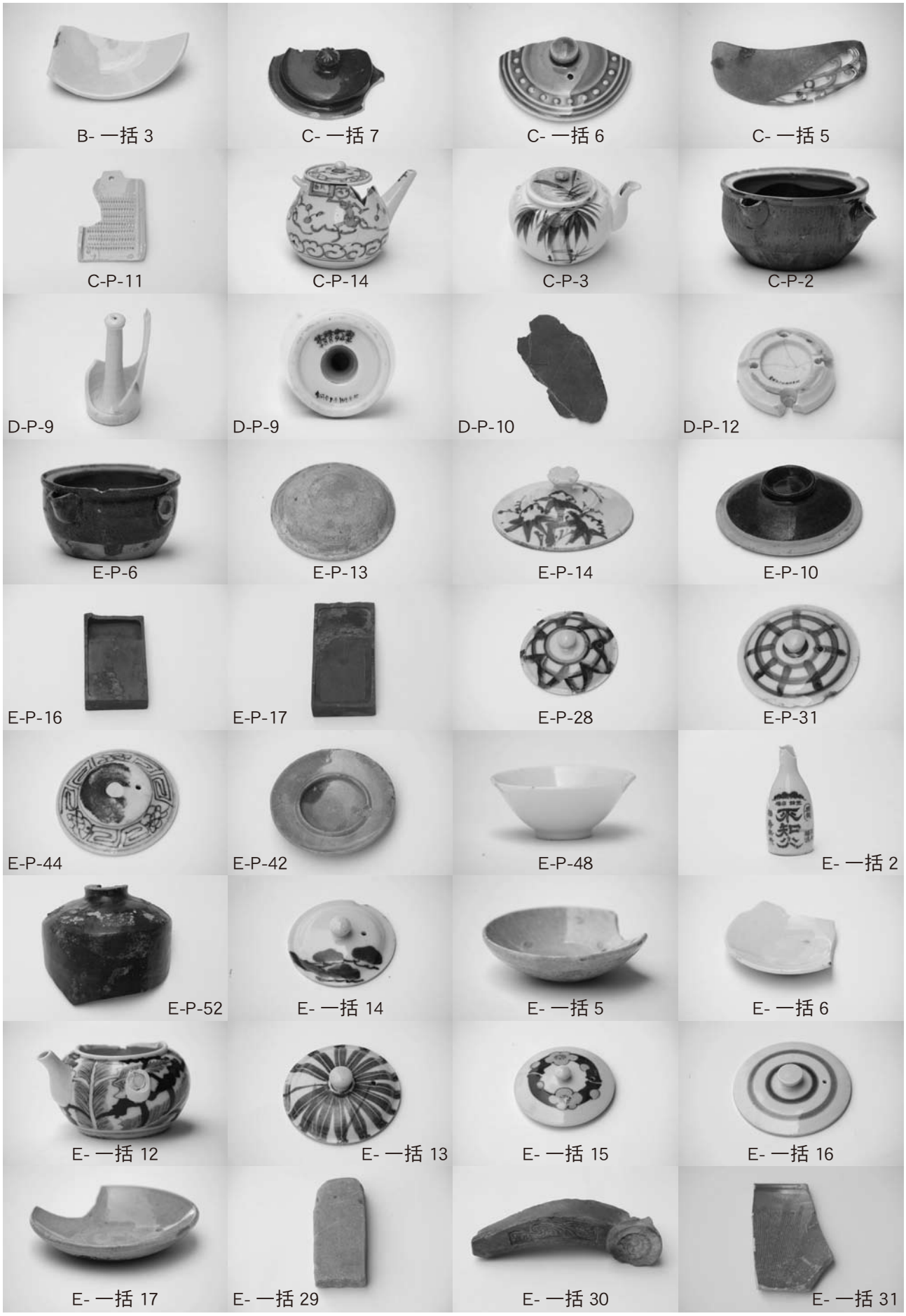

F- 一括 53
F- 一括 54
D-8G-P-1
D-9G-P-8
D-7G
F-8G-P-8
A-P-27
A-P-32
A-P-38
A-P-40
A-P-47
A-P-55
B-P-8
B-P-10
B- 一括 7
C - P － 4
C - P － 8
C - P － 12
C - P － 16
C - 一括 9
C - 一括 10
C - P － 3
C - P － 8
D - P － 11
E - P － 20
E - P － 21
E - P － 25
E - P － 33
E - P － 37
E - P － 40
E - P － 41
E - P － 45
E - P － 47
E － P － 51
E －一括 36
E －一括 37

図版7

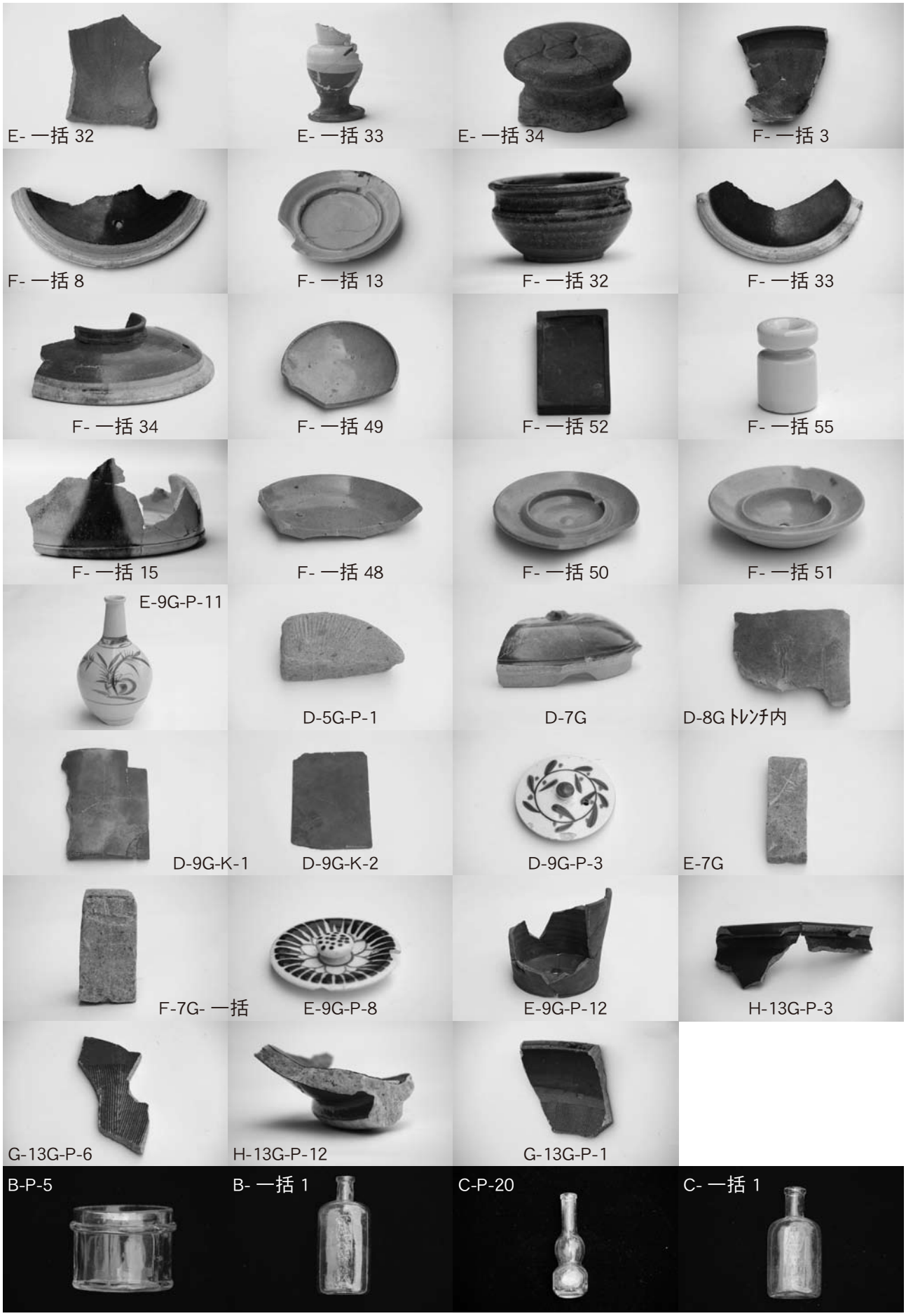
E ――括 38
E ――括 40
E ――括 41
E ――括 42
E ――括 43
E ――括 44
E ――括 45
E ――括 46
E ――括 47
E ――括 48
E ――括 49
E ――括 50
E ――括 51
E ――括 52
F ――括 56
F ――括 57
F ――括 59
F ――括 58
A-P-62
A-P-26
E ――括 39
F ――括 60
F ――括 60
B- 一括 2
B- 一括 4
B- 一括 5
B- 一括 6
C-P-6
C-P-17
C-P-19
E-P-7
E-P-8
E-P-9
E-P-12

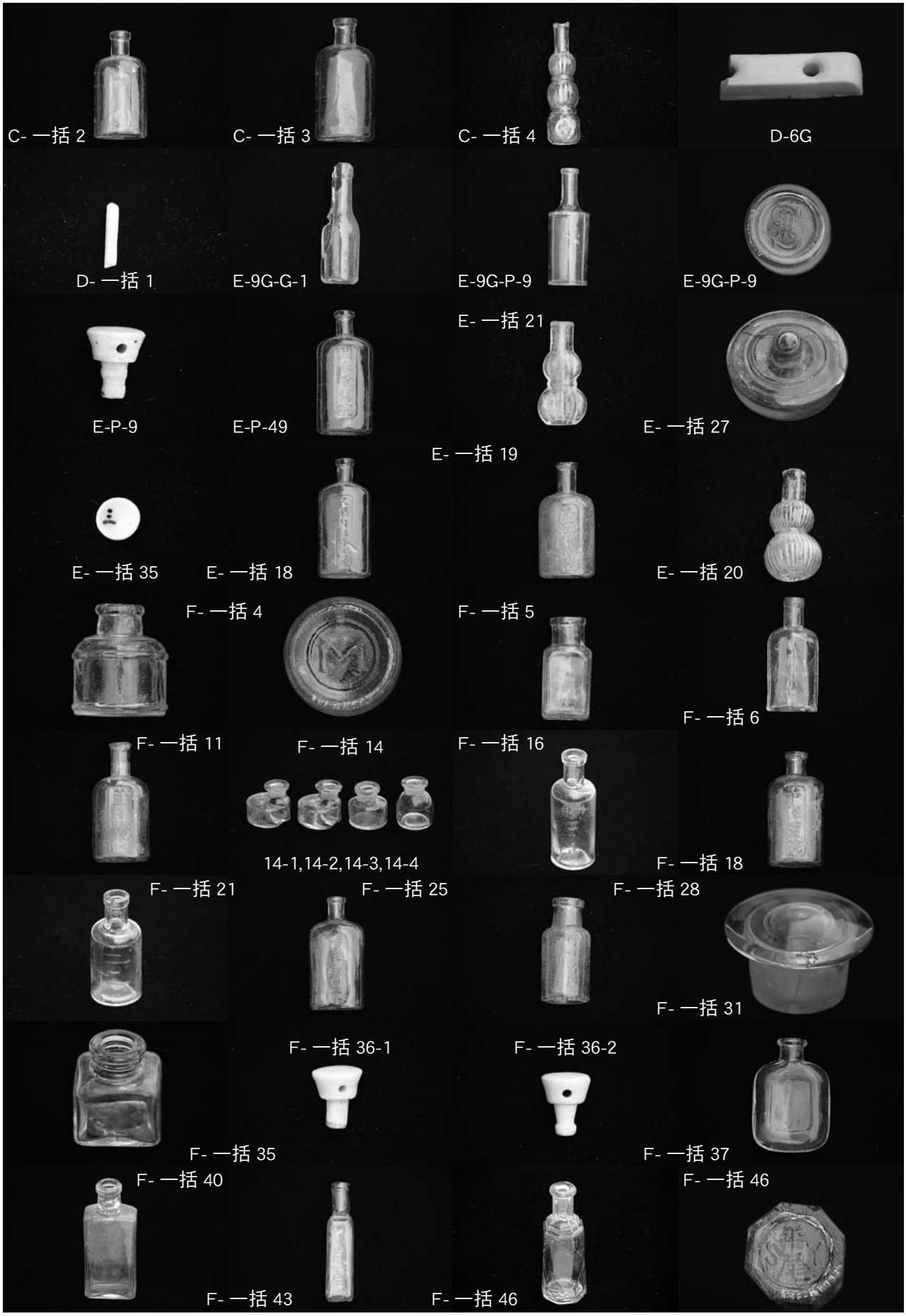
図版8

E- 一括 22
E- 一括 23
E-P-46
E-P-46
E- 一括 24
E- 一括 24
E- 一括 25
E- 一括 26
E- 一括 28
F- 一括 7
F- 一括 17
F- 一括 19
F- 一括 23
F- 一括 22
F- 一括 24
F- 一括 26
F- 一括 27
F- 一括 29
F- 一括 30
F- 一括 38
F- 一括 39
F- 一括 41
F- 一括 42
F- 一括 44
F- 一括 45
F- 一括 47
D-5G-G-1
E-5G- 一括 1
E-5G- 一括 2
E-8G
A-P-17
A-P-30
A-P-37
A-P-63
A-P-63
B-P-6


B- 一括 3
C- 一括 7
C- 一括 6
C- 一括 5
C-P-11
C-P-14
C-P-3
C-P-2
D-P-9
D-P-9
D-P-10
D-P-12
E-P-6
E-P-13
E-P-14
E-P-10
E-P-16
E-P-17
E-P-28
E-P-31
E-P-44
E-P-42
E-P-48
E- 一括 2
E-P-52
E- 一括 14
E- 一括 5
E- 一括 6
E- 一括 12
E- 一括 13
E- 一括 15
E- 一括 16
E- 一括 17
E- 一括 29
E- 一括 30
E- 一括 31

図版10


E- 一括 32
E- 一括 33
E- 一括 34
F- 一括 3
F- 一括 8
F- 一括 13
F- 一括 32
F- 一括 33
F- 一括 34
F- 一括 49
F- 一括 52
F- 一括 55
F- 一括 15
F- 一括 48
F- 一括 50
F- 一括 51
E-9G-P-11
D-5G-P-1
D-7G
D-8G トレンチ内
D-9G-K-1
D-9G-K-2
D-9G-P-3
E-7G
F-7G- 一括
E-9G-P-8
E-9G-P-12
H-13G-P-3
G-13G-P-6
H-13G-P-12
G-13G-P-1
B-P-5
B- 一括 1
C-P-20
C- 一括 1


C- 一括 2
C- 一括 3
C- 一括 4
D-6G
D- 一括 1
E-9G-G-1
E-9G-P-9
E-9G-P-9
E- 一括 21
E-P-9
E-P-49
E- 一括 27
E- 一括 19
E- 一括 35
E- 一括 18
E- 一括 20
F- 一括 4
F- 一括 5
F- 一括 6
F- 一括 11
F- 一括 14
F- 一括 16
14-1,14-2,14-3,14-4
F- 一括 18
F- 一括 21
F- 一括 25
F- 一括 28
F- 一括 31
F- 一括 36-1
F- 一括 36-2
F- 一括 35
F- 一括 37
F- 一括 40
F- 一括 46
F- 一括 43
F- 一括 46

報告書抄録

ふりがな	あおやぎかしあと
書名	青柳河岸跡
副題	増穂地区築堤護岸整備事業に伴う青柳河岸跡発掘調査報告書
シリーズ名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第２５９集
編著者名	山本茂樹・猪俣一弘
発行者	山梨県教育委員会・国土交通省関東地方整備局
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター
所在地・電話	〒４００－１５０８　　山梨県甲府市下曽根町９２３ ＴＥＬ　０５５　（２６６）　３０１６
印刷所	株式会社　峡南堂印刷所
発行日	平成 21 年（2009）３月１５日
所在地	山梨県南巨摩郡増穂町青柳
	やまなしけんみなみこまぐんますほちょうあおやぎ
	25,000 分の１地形図　鰍沢
	位置　東経１３８°２８′２８″北緯３５°３３′１９″ （世界測地系）　遺跡の中心
	標高２４３．７０ｍ
	市町村コード　３６１
	遺跡番号　０３７
調査原因	増穂地区築堤護岸整備事業
調査期間	２００７年６月４日～９月２７日
調査面積	２，２５０㎡
主な遺構	石垣１面、土堤状跡及び河岸お蔵道３面
主な出土物	江戸時代の陶磁器および明治時代以降の陶磁器類、古銭５枚、ガラス製品、石製品
特記事項	青柳河岸跡の本体へ続く道

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第２５９集

青柳河岸跡

増穂地区築堤護岸整備事業に伴う青柳河岸跡発掘調査報告書
印刷日　平成 21 年（2009）３月１０日
発行日　平成 21 年（2009）３月１５日
編　集　山梨県埋蔵文化財センター
　　山梨県甲府市下曽根町９２３
　　ＴＥＬ　０５５　（２６６）　３０１６
発　行　山梨県教育委員会
　　国土交通省関東地方整備局
印刷所　株式会社峡南堂印刷所